

沖縄県立博物館紀要

第 11 号

1985

沖縄県立博物館

目 次

多和田真淳調査収集の考古資料（IV）	多和田 真淳・知念 勇	1
山内盛彬旧蔵「御拝領野村工工四」について（二）	宣保 榮治郎	15
パソコンによる博物館資料の整理の試み	当山 昌直	29
絵画三題一般元良・查丕烈・孫億一	津波 古聰	35
徳之島聞書き	上江洲 均	39
石碑概観—県内の石碑採択を通して—（一）	上江洲 敏夫	右1

多和田真淳調査収集の考古資料 (IV)

★ 多和田真淳・知念 勇 ★★

1. 百名第2貝塚

発見 1955年 多和田真淳

玉城村百名に所在する沖縄編年前期の貝塚。標高50米の琉球石灰岩の崖下に遺物包含層が形成されている。包含層は崖と巨大な岩塊とのあいだにできた隙間に、幅3~4米、厚さ4米堆積している、その断面や下方斜面に多量の貝殻や土器などがみられる。その崖上にはわずかに、土器片の散布がみられるが、包含層は形成されない。1980年(昭和55年)に、沖縄県教育庁文化課により、本遺跡の試掘調査が実施され、報告された。^{注1}それによると、出土遺物は沖縄編年の前期に限定されている。

この調査によって伊波・荻堂式土器、両刃の磨製石斧、貝や骨制の装身具等が出土している。土器には器体上半部に瘤状の貼付外耳をもつものもある。奄美系の面縄前庭式土器も得られている。

貝製品にはサメ歯状垂飾や精巧に作られたペンダント類・腕輪などがある。貝は海産種を主体に92種(陸産のマイマイ類が多い)出土している。

土 器

数拾片の細片が採集されているが、有文等の特徴があるものは、第1図1~7の7個である。

第1図1は、口縁部上端に叉状具による平行連点文が一条と、口唇部に一列の連点文が施されている。表裏面とも灰白色を呈するが芯部は黒褐色となる。外面には器面調整時の擦痕が残っている。焼成は弱くもろい、胎土には石英粒と砂粒を多量に含む。器厚6粋。

同図2は、波状口縁で外反する深鉢形土器である。波頂部から胴部と口縁に平行して幅6~8粋の帶状貼附文が施されている。この貼附文上と口唇部には細い叉状具による2条連点文が施されている。器色は内外とも赤褐色で芯部は暗黒色となる。胎土には石英粒と砂粒が混入する。器厚9粋。器形等の特徴から伊波式とみられる。

同図3は、口経部の破片、経部下端とみられるところに単範工具による点刻文が2列とその上に三本の斜沈線文が施される。外面は褐色となるが芯部と外面は黒色で、内面には横位の調整痕が施される。胎土には石英粒と砂粒が混入する。器厚は7粋、器形等の特徴からみると、荻堂式の特徴がみとめられる。

同図4は、胴部の有文破片、経部には叉状工具によるとみられる2条連点押引文が2列施され、その下端には鋸歯状の沈線文が一列施されている。荻堂式の深鉢形土器である。外面は黒色で内面は赤褐色、芯部は黒色である。胎土には多量の石英粒と砂粒が混入する。

同図5は、口縁部が花鉢状をなすカヤウチバンタ式の口縁部片である。内外面ともよく器面調整が行届いている。器色は外面は褐色で外面と芯部は暗褐色である。胎土には石灰質の細片が多量に混入している。

同図6は、経部から胴部にかけてのいわゆる奄美系の土器である。現存部の下方が器厚を減じ段

(★たわだ しんじゅん 那覇市史編集委員)
(★★ちねん いさむ 県立博物館学芸員)

差を生ずることと、その上部に文様を有することから、嘉徳式特有の口縁部である。尖端が鋭利な単範工具によって押引された三本の横位文が施されている。

石 器

第6図1は、粘板岩製のスレート状の刀物で、図の上端と右端は片刃状の刃となっている。下端部は欠失する。最大幅5.3釐、厚さ2.5耗である。

2. 渡嘉比久貝塚

渡嘉敷と阿波連のほぼ中間にある海岸砂丘に立地する。同砂丘は三方を山にかこまれ、西側が東シナ海に面している。遺跡の立地する海岸は、現在渡嘉比久ビーチとして夏はにぎわいをみせている。1966年（昭和41年）沖縄学生文化協会によって、表面調査がなされ報告された。^{注2}それによると、土器（壺形、甕形、鉢形）貝錘、球状石器などが発見されている。くびれ平底、尖底およびコブ状突起を有する鉢形土器等が出土する。これによって、本遺跡は沖縄編年後期初頭からグスク時代への移行期に位置づけられる。

土 器

第2図1は、口縁部にコブ状の把手が貼付された鉢形土器である。口径は測定不能である。内外面とも褐色をなし、範削りの痕がナデ消されているが内底部附近に範削りの痕が残されている。口唇部が尖り、胴部から底部にかけて、厚くなっている。胴部中央部での器厚は約1釐である。焼成は良く硬質の土器で、胎土にはサンゴ粒が混入する。器高約8.3釐である。

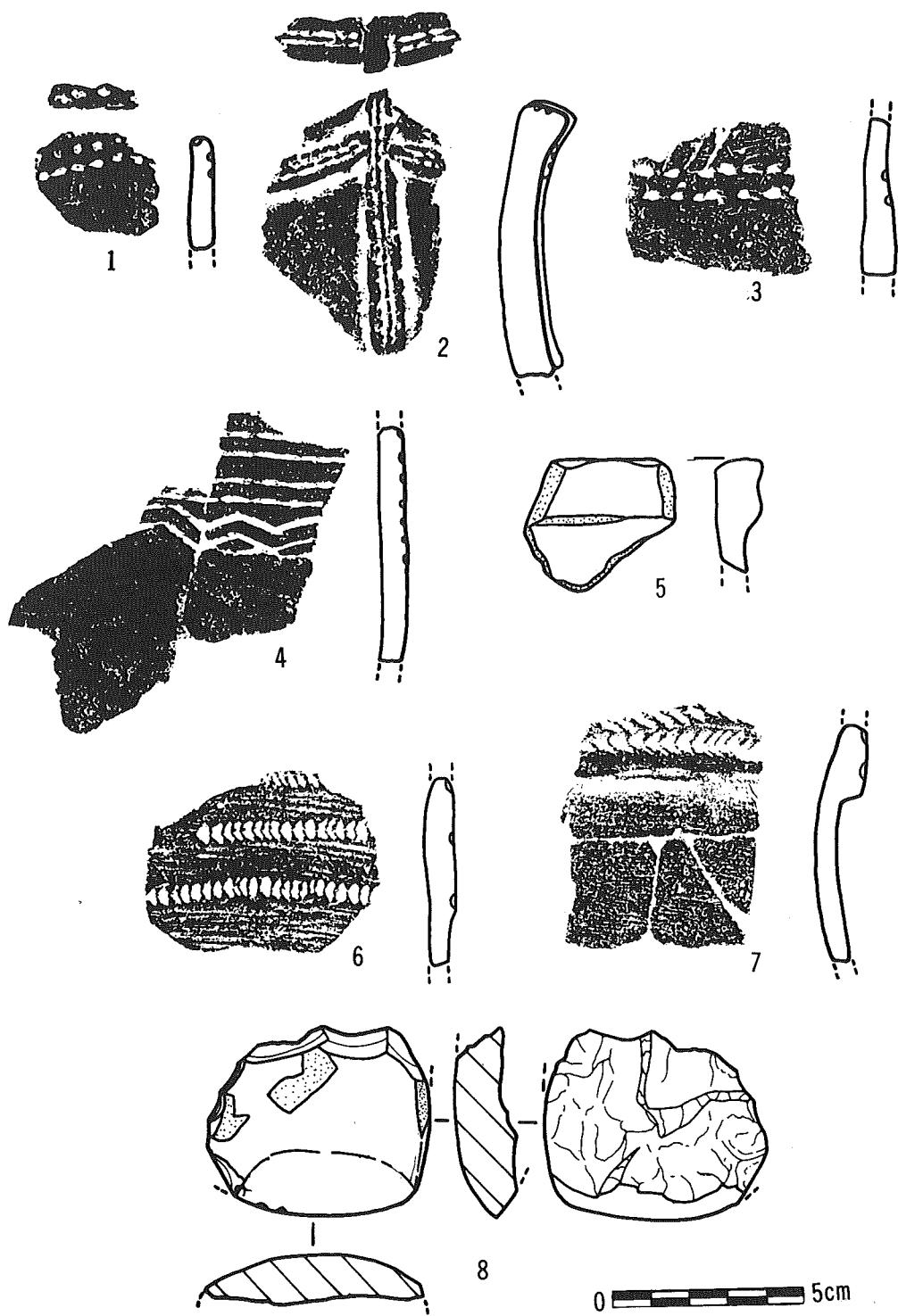
第2図2は、口縁部が外反する甕形の無文土器である。縁部には成形時の指頭圧痕が残っている。焼成よく、硬質で内外面は黄褐色をなす。胎土には砂粒が多量含まれている。口唇部は円くなる。器厚4耗と薄手の土器である。

同図3は、口唇部が尖り、口縁部がわずかに外反する甕形の土器とみられる。器色は全面黄褐色で、硬質の土器、胎土には石英粒と砂粒が混入する。器厚7耗。

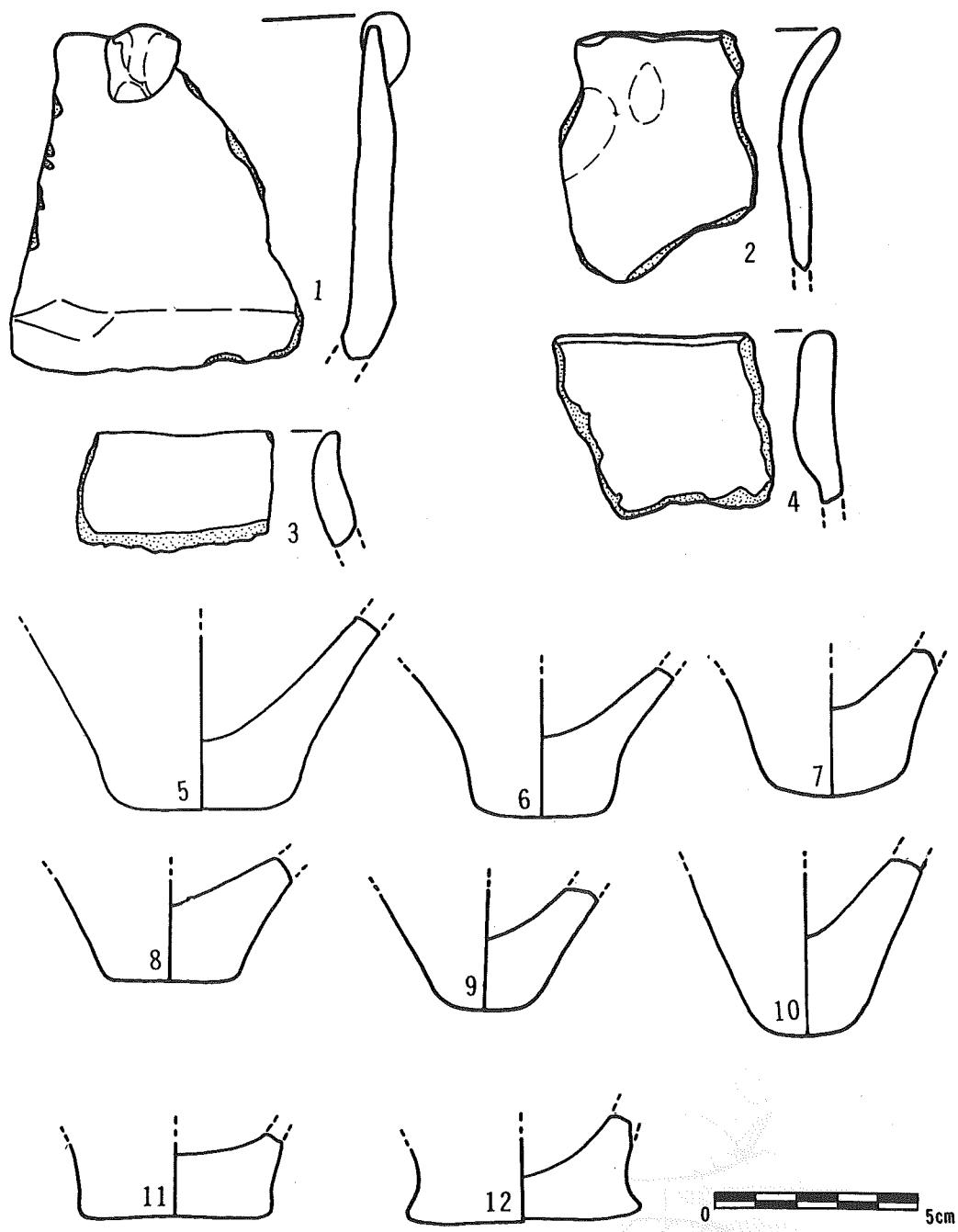
同図4は、平口縁をなし、口縁部が直交する。外面は黄褐色で表面がよく調整されている。内面は赤褐色をなし、口縁部は内側に折り返されており、図にみるように内部が厚く有段状をなす。焼成は前述図1～3に比して悪くもろい。器厚7耗で胎土には石英粒と砂粒を含んでいる。無文であるが後期では古いタイプの土器とみられる。

同図5は、底部から胴部へかけてふくらみをもつ甕形土器の底径4.3釐の平底土器である。現存部でみると、輪積み痕から欠失しており、図にみる部分を作り出してから積み上げていったことが考えられる。焼成良好な硬質の土器である。外面は器面調整痕がナデ消されているが内面には条痕が明瞭に残されている。全面的に灰白色となる。胎土には砂粒と赤褐色をした粒が混入する。継目の器厚8耗、底部厚1.7釐。

同図6は、底部から胴部への移行部分がくびれ状になり、胴部が大きく張るタイプの土器である。焼成は良く、かなり硬質である。底径が3.4釐と小さい。外面は灰白色で内面は赤褐色。胎土には石灰片が混入する。器厚6耗、内外面とも調整痕がナデ消されている。



第1図 百名貝塚



第2図 渡嘉比久貝塚

同図7は、底部から胴部への立上りが急な円底的平底土器である。焼成は良く硬質で、器色は外側が褐色で内面は黒色となる。胎土には石英粒と砂粒及び赤褐色の粒が混入する。底径2.3厘、底部厚2.2厘と厚底である。

同図8は、底部から胴部にかけて、急傾斜をなすため胴部にふくらみをもつタイプの土器である。内底部は外側へ急傾斜するため内底径はせまくなっている。硬質で、内外面とも赤褐色となるが芯部は灰色または黒色となる。底径3.3厘、底部厚1.8厘で比較的厚底である。

同図9は、円底的平底で、底部から胴部への立上りが急である。硬質で内外面は灰白色または褐色となっている。胎土には砂粒と赤褐色粒が混入する。底径2厘、底部厚1.8厘である。

同図10は、円底的平底で、底径が2.1厘と小さい。底部から胴部への立上りは急である。これまでの底部中最も硬質である。外面は赤褐色、内面は黒色となる。胎土には、砂粒が混入し赤褐色の粒子も少量混入する。底部厚2.5厘と厚底である。

同図11は、いわゆるくびれ平底の土器である。内外面とも赤褐色の硬質な土器である。胎土には砂粒が含まれるが混入物はきわめて少くなく精選された粘土が使用されている。底径4.8厘、底部厚1.5厘である。

同図12は、くびれ平底で、図11に比してくびれが顕著である。外底部は多小上げ底状となっている。内外とも褐色でよく焼き締められている。胎土には石英粒と砂粒が混入する底径5.8厘、底部厚1厘である。

石 器

石器は、第3図の方形のクボミ石である。敲打痕は側面が三面と上下両面の5面にみとめられる。側面では、図の下部だけは研磨が丁寧で打欠痕もみあたらない。長軸の最大長7.8厘、短軸の最大は6.8厘である。重量530g、石質角セン玢岩である。

3. 大浜貝塚

発見 1955年 多和田真淳

大浜部落の南端から東シナ海へ注ぐ大小掘川があり、貝塚は川の北側に面した琉球石灰岩丘陵の崖下に立地する。現在は遺物の採集も困難な状態にあり、遺跡の中心地は確定できない。多和田の記録では、後期下半（具志頭城系）となっている。^{注3}

土 器

第3図2は、口縁部が破状をなす小波片のものである。口縁部に成形時のものとみられる指頭痕が残っている。焼成よく硬質の土器で、外面は黒色で内面は赤褐色となる。胎土には砂粒と赤褐色粒が混入する。器厚は4耗と薄手である。

同図3は、口唇が円くなり、口縁部が外反する土器である。この土器は芯部の一部と内面の一部が褐色である他は、すべて黒色で真黒である。前述図2に比するとともろい感じのする土器である。胎土には砂粒が混入する。器厚4耗。

同図4と5は、接続はできないが同一物とみられる土器である。口唇部が円くなり、外反する土

器、内外面は黄褐色で芯部が黒色となる硬質の土器である。胎土には砂粒が混入する。器厚は5粩である。

同図6は、いわゆるくびれ平底の土器である。小片のため底径は不明である。硬質で、内外面灰白色で内面は褐色となる。

同図7は、黄褐色をした硬質のくびれ平底の土器である。胎土には砂粒の混入がみられる。底径4.7粩、底部厚7粩である。

同図8は、底部を押しつぶした格好の土器で、くびれが顯著である。内外面とも黄褐色で芯部の一部が黒色となっている。胎土には砂粒と赤褐色粒が混入する。底部厚が5粩と薄手の土器である。

4. 知花遺跡

発見1960年4月、多和田真淳・金城盛雄

沖縄市知花の城畠原にある沖縄前・中期とグスク時代の貝塚や遺物包含層からなる広大な遺跡である。知花十字路西方、標高70米の琉球石灰岩丘陵上に立地する。一帯は戦後まもなく大規模な採石工事が行なわれ、遺跡が壊滅するおそれがあったため、1962年、琉球政府文化財保護委員会によって、緊急発掘が行なわれた。遺跡はA～Dの4地点からなる。A地点は4層からなり各層ともほとんど獸・魚骨や貝殻の出土しない、いわゆる中期特有の包含層で、土器には室川上層式も出土している。下層からは、面縄束洞式・嘉徳工式土器が数片出土している。発掘後も遺跡一帯は採石が続行され、現在は壊滅状態にある。発掘調査については、1978年3月沖縄県教育委員会によって報告された。今回報告するのは、A地点遺跡の採集である。

土 器

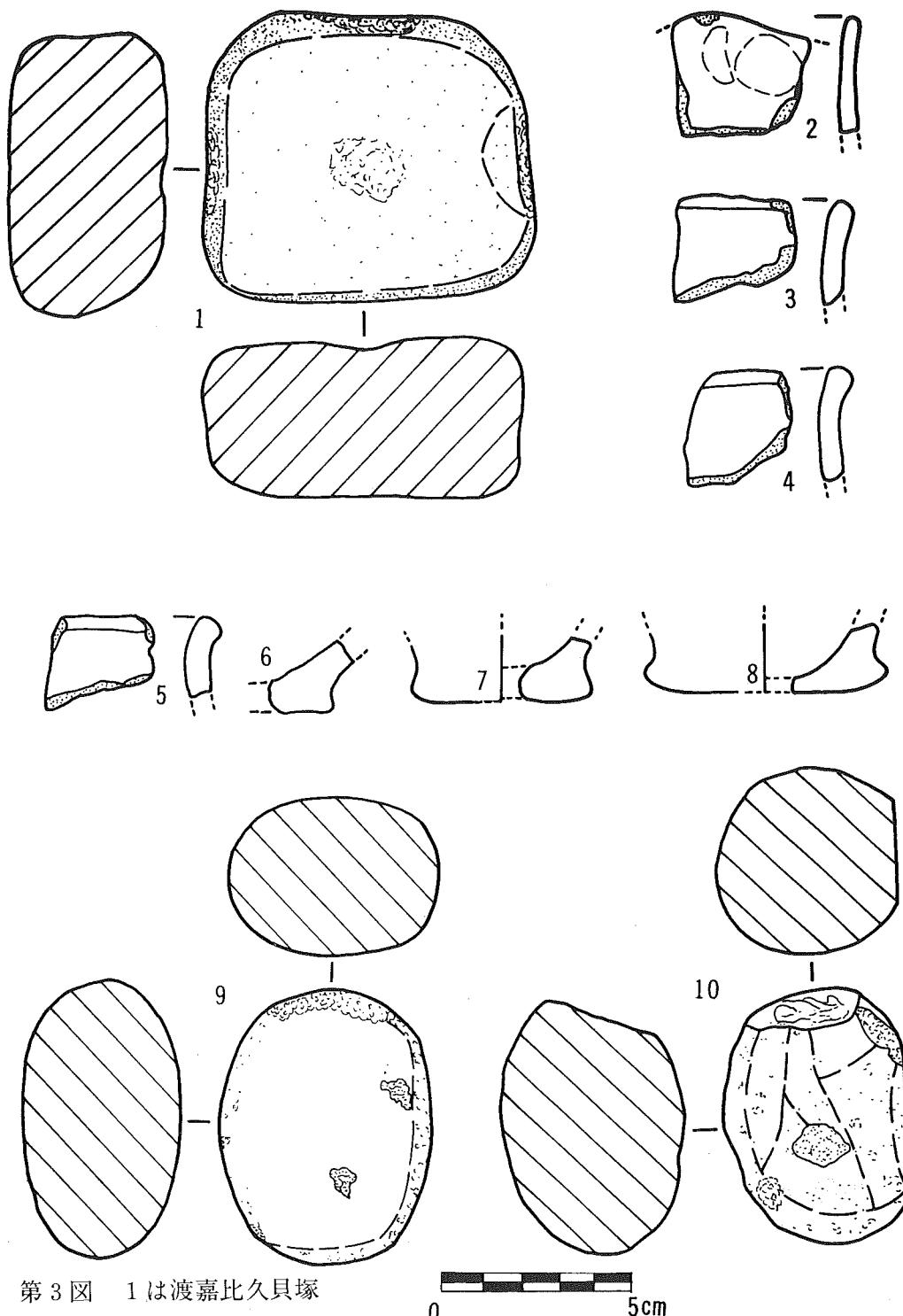
第4図4は、口縁部の破片、図の上端部に叉状工具によるとみられる2条連点文が2列施されている。器面は全面赤褐色で胎土には多量の石英粒と砂粒が混入し、手ざわりがザラつく感じである。器形等からみると荻堂式の特徴を有する。器厚は5～7粩である。

同図5は、口縁部とみられる破片、胴部との境目に相当する箇所に文様が施されている。幅4粩程の単範工具による横位の押引文があり、その上を斜沈線文で埋めている。胎土には石英と砂粒が混入する。外面は黒褐色で内面は褐色となる。器厚4粩。

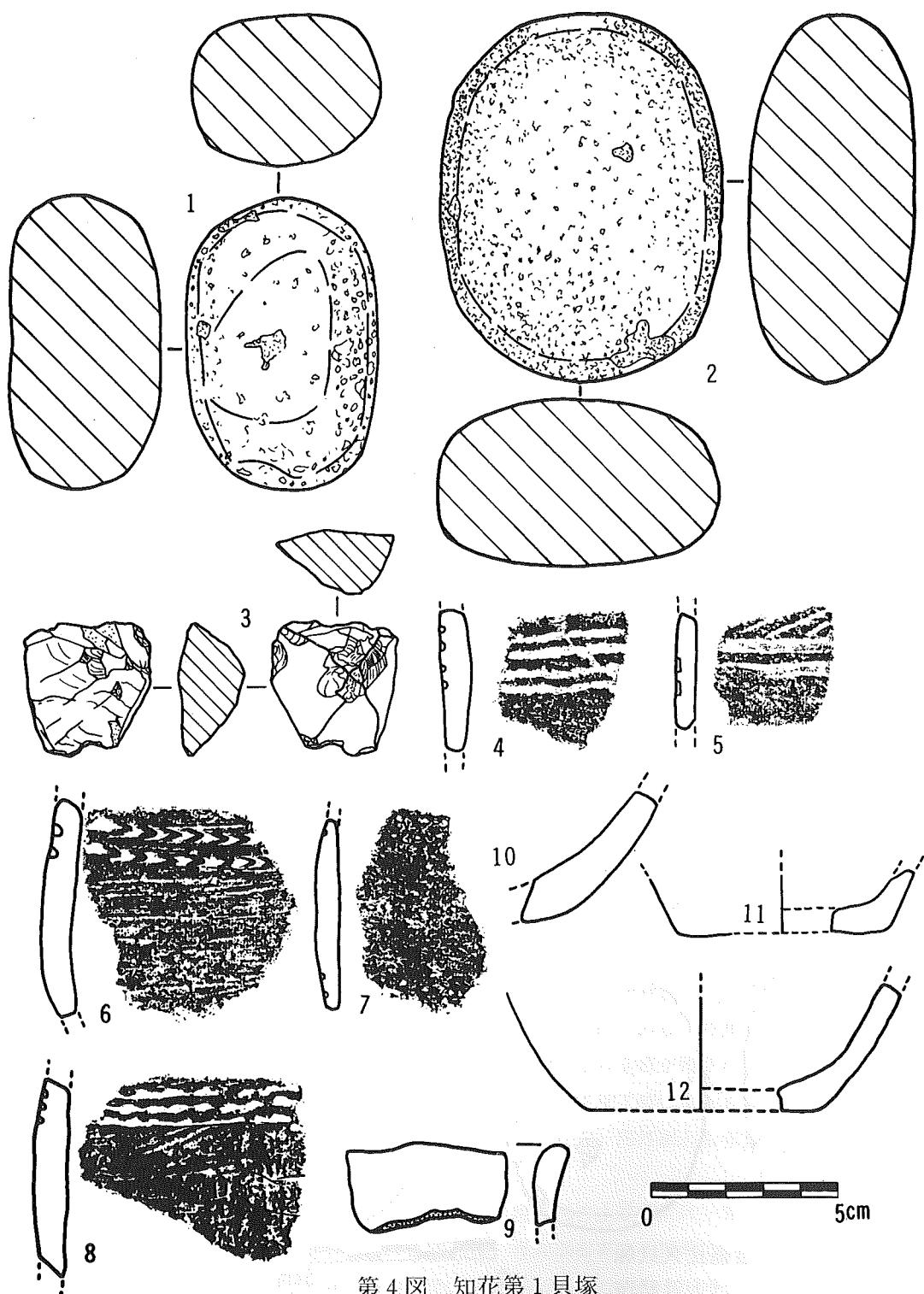
同図6は、口縁部から胴部にかけての破片である。上端部に先端の鋭利な単範工具によって、右から左へ横位の押引文が2本みられる。焼成が弱く、もろい土器である。外面赤褐色となる。胎土には多量の石英粒と砂粒を含む。外面には横位の器面調整による条痕が残されている。器厚7粩。

同図6は、口縁部の破片、現存部の上下端に先端の鋭利な叉状工具による点刻文が一列施され、その間が無文となる。施文の構成からして、伊波式とみられる。内外面とも赤褐色で、胎土には砂粒が多く混入する。器厚5粩で比較的薄手である。

同図8は、口縁部から胴部にかけての破片である。現存部の上端部には、先端の細い叉状工具によって横位の連点文が右から左方向に施されている。現存部右寄りの箇所にコーナーをなす部分があり、現状からみるとその上端が波状の口縁で、下端部にも上と同様の文様が施され、その間は無文となっている。紀要第9号^{注5}で報告した第4図にみられる伊波式土器に類似するとみられる。外面



第3図 1は渡嘉比久貝塚
2～8は大浜貝塚
9、10は知花第1貝塚



第4図 知花第1貝塚

と内面は赤褐色で芯部は黒色となる。胎土には石英粒と砂粒が混入する。

同図9は、口縁が多少波状をなす無文の外傾する土器である。内外面とも褐色をなし、胎土には多量の石英粒が混入する。表面調整がはげ落ちているので手ざわりがザラついている。小片のため口径不明、器厚4耗と薄手である。

同図10は、円底とみられる破片で、全面とも表面がはげ落ちているので、手ざわりがザラついている。底部厚約1粩で胎土等の特徴からみると、同図7に類似する。

同図11は、底部から胴部への立上りが外傾する平底の土器である。内面と外面は、赤褐色となるが芯部は黒色である。胎土には石英と砂粒が混入し、焼成は悪くもろい。底径推算6.3粩、胎土混入物は同図6に類似する。

石 器

石器は磨石とクボミ石がある。

第3図9は、卵形をした磨石である。最大長7.1粩、最大幅4.6粩、重量224gの石質砂岩製、全面磨製。

同図10は、卵形をした磨石であるが、一面平坦に研磨が施されており、一方の頂部に敲打によるとみられる打欠痕がみられる。最大長6.7粩、最大幅4.7粩、重量207gで砂岩製である。

第4図1は、図示した面とその裏に打痕があり、凹石としての用途が考えられる。最大長7.4粩、最大幅4.5粩、厚さ4.8粩、重量275gで砂岩製。

同図2は、隋円形をした磨石である。全面丹念に研磨が施されている。最大長9.7粩、最大幅7.1粩、厚さ4.5粩、重量540g、石質角セン玢岩。

5.喜友名貝塚

発見 1954年5月30日 多和田真淳

喜友名貝塚は、宜野湾市字喜友名に所在する。国道58号と県道30号線の交わる伊差交差点から、県道30号線の坂道を普天間宮へ向って、約50~100米登った道路を中心に貝塚は形成されていたようである。戦後まもなく行なわれた道路工事によって、ほとんど破壊され、現在は湮滅状態にある。1954年の発見当時本貝塚の範囲は喜友名グスクにまたがって遺物が採集されたようである。遺跡は、琉球石灰岩を基盤とした標高40米の中位段丘上に立地する。1981年6月宜野湾市教育委員会による分布調査が行なわれ、県道際の民家近くまで、中期とグスク時代の遺物包含層のあることが確認されている。数点の遺物が採集され報告^{往6}されている。

土 器

第5図1は、尖端が3耗前後の幅の広い叉状工具によって平行点刻文が2列施されている。現存部の口縁部右端が突起する。赤褐色で、胎土には石英粒と砂粒が混入する。胴部の器厚5耗、荻堂式土器である。

同図2は、口縁部が多少外反し、縦部には单範工具による横捺刻文が2本施されている。赤褐色で胎土には石英粒と砂粒が混入する、胴部器厚7耗。

同図3は、口縁断面が三角形をした、いわゆる宇佐浜式土器の口縁部である。口縁部に単範工具による点刻文が施されている。褐色で、胎土には多量の石英粒が混入し、手ざわりがザラつく感じである。口縁部の厚さ3耗と薄手である。

同図4は、無文の宇佐浜式土器の口縁部である。器色は褐色で胎土には多量の石英粒を含む、口縁部の器厚5耗、壺形とみられる。

同図5は、口縁部が花鉢状をなした。いわゆるカヤウチバンタ式の有文土器である。花鉢状の外面には尖端を鋭利に尖らした工具によって、点刻文が一列施されている。褐色を呈する。表面には調整痕が残る。胎土には石英粒を多く混入する。口縁部の厚5耗。

同図6は凸帯文がL状に施された口縁部とみられる破片。内外とも褐色をなし、多少硬質の土器、石英粒が混入、器厚6耗。

同図7は、底部から胴部への立上りが外傾する平底の土器。赤褐色で胎土には石英粒が混入する。底部厚1.2厘、焼成、胎土や器形などから同図1や2タイプの底部とみられる。

6. 魚下遺跡

識名台の北縁部魚下原台地に立地する遺跡である。多和田は魚下祝部遺跡と呼んでいた。標高85m。高宮廣衛氏によって那覇市史に報告されている。

土器・石器

同図9は口縁部が外反する鉢形の土器である。全面黄褐色を呈し、小量の白色物質が含まれる他は混入物は含まれず、焼成もよく堅致な土器である。口縁部と外面が範で調整されており、平口縁となっている。胴部厚さ7耗。

同図10は、口縁部先端が尖って多少内湾気味の小形鉢である。全面赤褐色をなし、胎土には白色の物質が混入する。外面には指頭の調整痕があり、内面には調整良好でスベスベした手ざわりである。胴部厚さ6耗。

同図11は、底部から胴部へかけて外傾する平底の土器、内外面とも黄褐色でアバタ状をなす。外面には、器面調整時に混入物が引きつられた痕が残っている。底部厚8耗。

同図8は、当初石斧として作成され使用されたとみられるが、現状は刃部が石斧としては使用出来ない状態まで磨り減らされている。長軸9.6厘、刃部最大幅4.2厘、重量180gで石質輝緑岩。石器の石質の同定は教育庁教育センター研究主事の大城逸朗氏にお願いした。末尾ながら感謝致します。

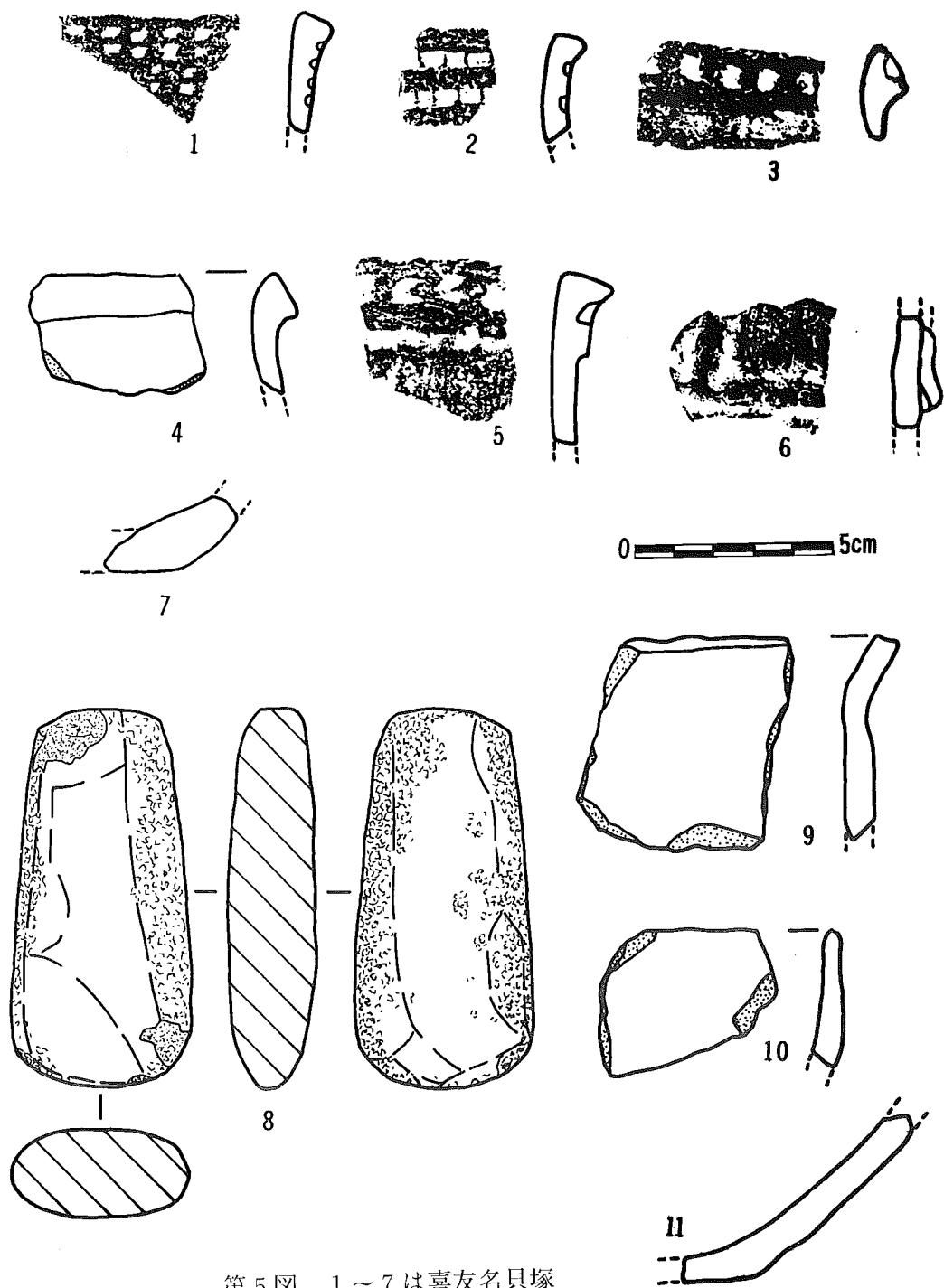
注1. 沖縄県教育委員会「沖縄県玉城村百名第二貝塚発掘調査報告書」沖縄県文化財調査報告書第38集 1981年3月

2、湧川稔・津波古幸夫「渡嘉敷島の遺跡」『郷土』第3号、1966年、沖縄大学沖縄学生文化協会

3、多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺(二)」『古稀記念多和田真淳選集』古稀記念
多和田真淳選集刊行会編

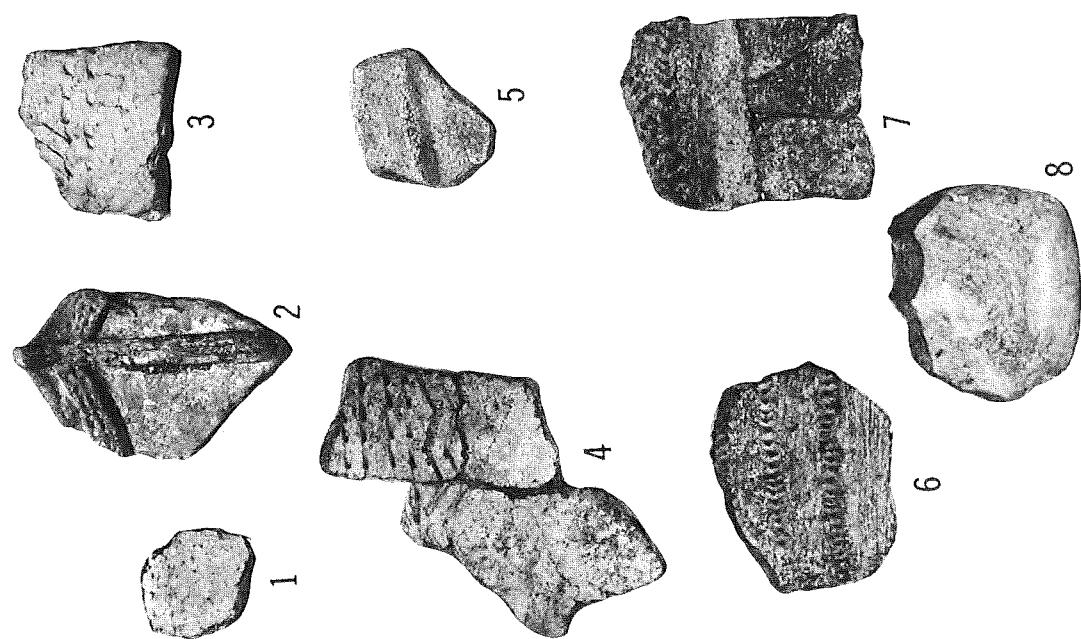
4、多和田真淳他「知花遺跡群」沖縄県文化財調査報告書第16集、1978年 沖縄県教育委員会

5、多和田真淳・知念 勇「多和田真淳調査収集の考古資料(II)」『沖縄県立博物館紀要』第9号
1983年、沖縄県立博物館 6、注4と同じ

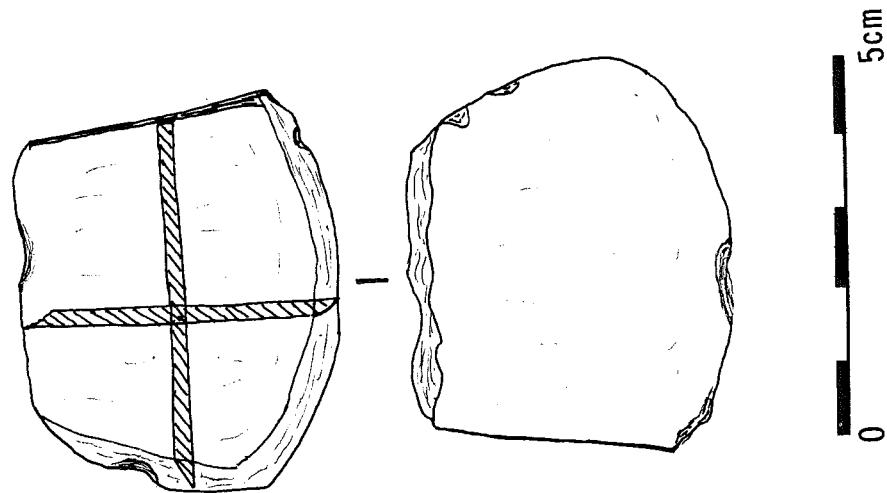


第5図 1～7は喜友名貝塚
8～11は魚下遺跡

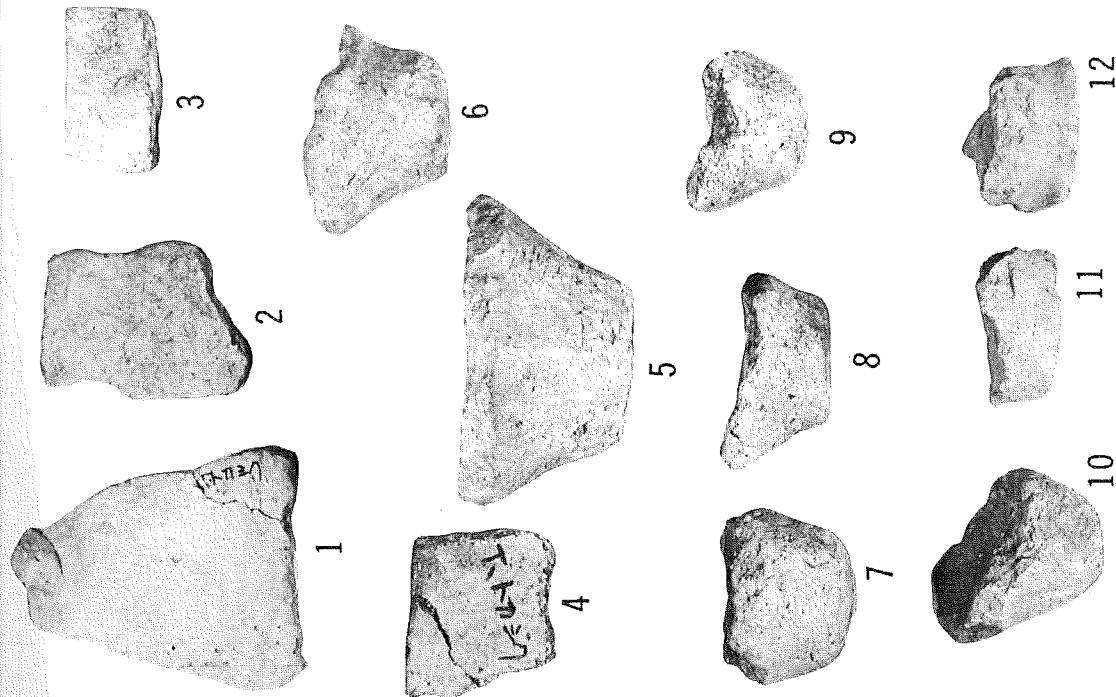
図版 1 百名貝塚



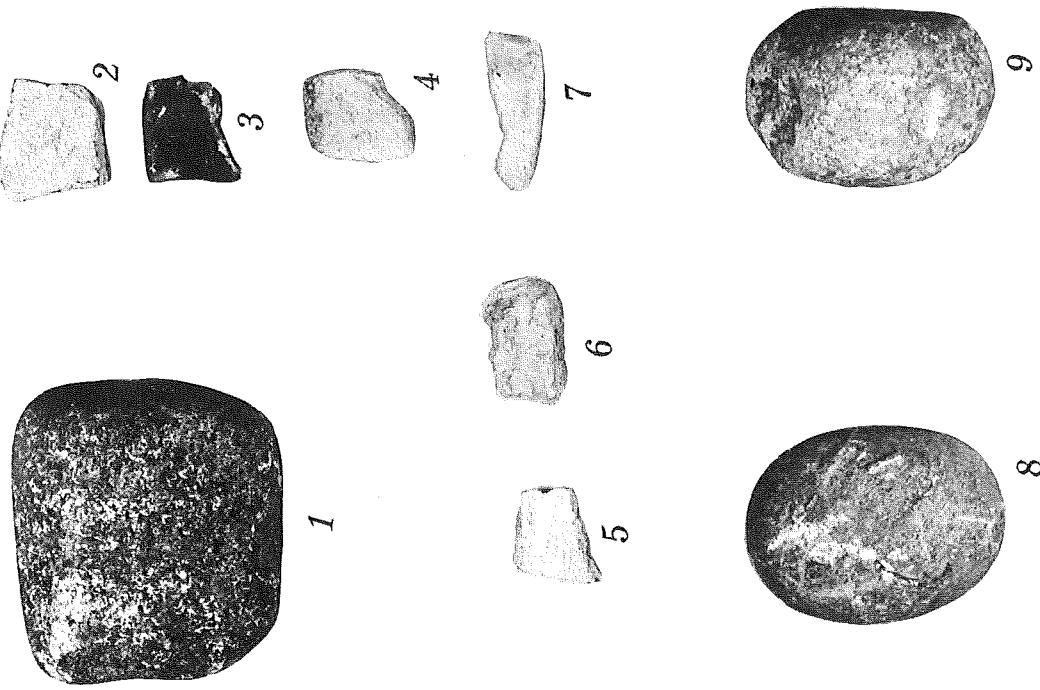
第 6 図 百名第 2 貝塚



図版1 目石貝塚

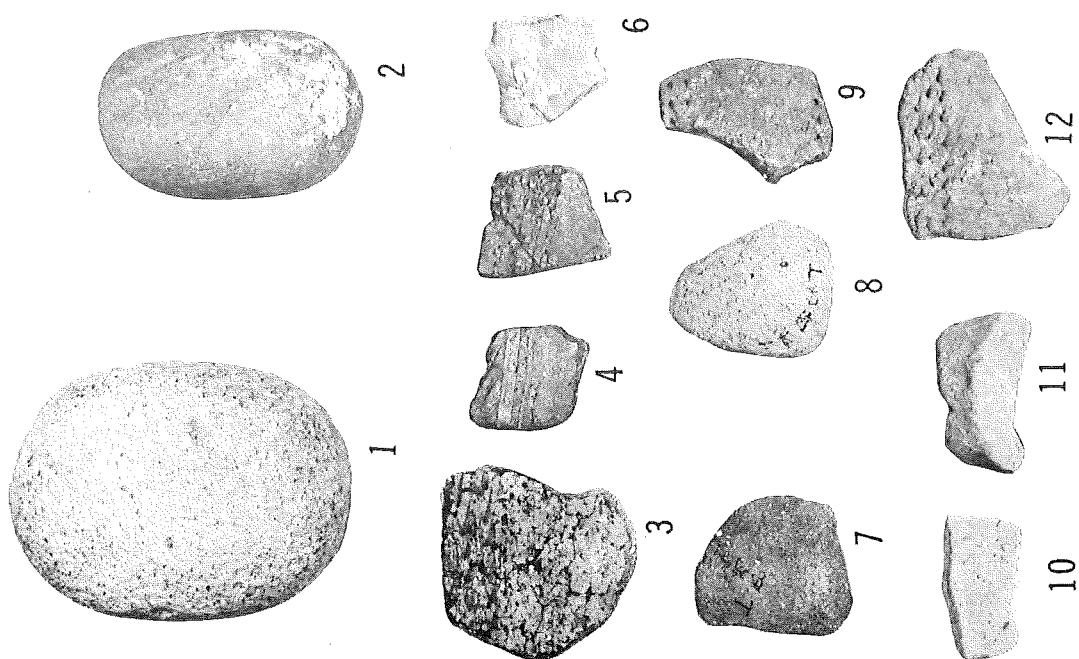


図版2 渡嘉比久貝塚

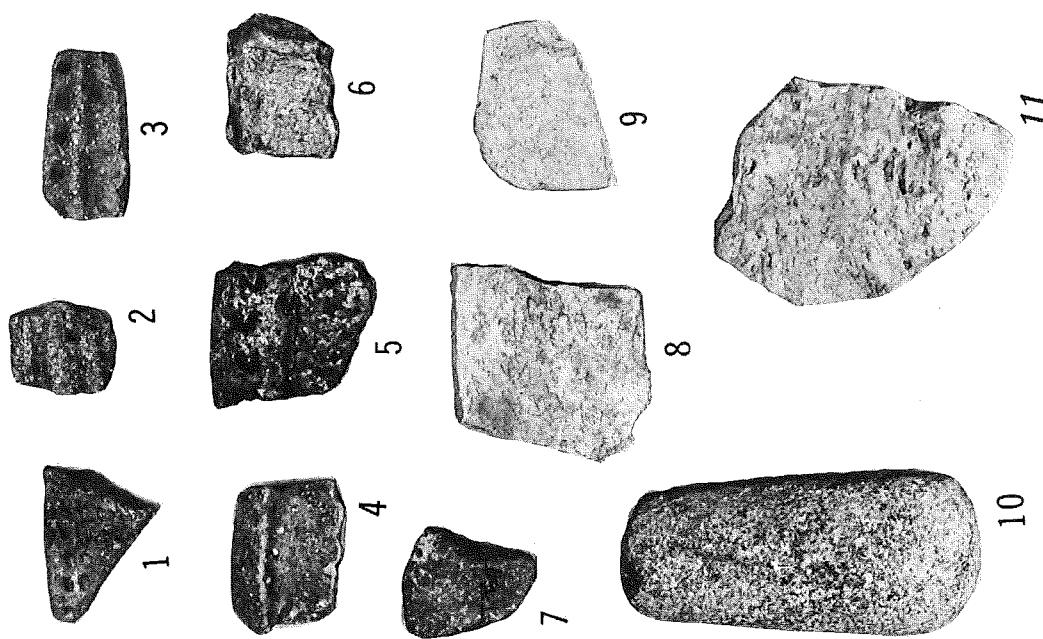


図版3 1は渡嘉比久貝塚 2～8は大浜貝塚
9・10は知花第1貝塚

図版4 知花第1貝塚



図版5 1～7は喜友名貝塚 8～11は魚下遺跡



山内盛彬旧蔵「御拝領野村工工四」について (二)

(工工四 中巻)

宜保榮治郎



作田節

ホバナサキヂレバ	チリヒヂモツカヌ	ツヤウン	ツヤウン
シラチヤ子ヤナビチ	アブシマクラ	ツヤウン	ツヤウン
シラチヤ子ヤナビチ	アブシマクラ	ツヤウン	ツヤウン

チャンナ節

ムカシゴトヤスガ	ナママデモキモニ	ジヤンナ	ジヤンナ	ヤウ
ワスララヌモノヤ	アレガナサケ	ジヤンナ	ジヤンナ	ヤウ

首里節

マセコマテヲレバ	ココテルサアモノ	ハイヤマタ	ハナノサトノシヤウ
オスカゼットツレテ	ハイヤマタ		
シノディラナ	サトガバンドコロ		

ショドン節

マクラナラベタル	ユメノツレナサヨ	サトノシヤウ
ツキヤイリサガテ	フエノヤハン	アレ サトノシヤウ

暁節

アカツキヤナユイ	ヤウ	イキヤオサウズメシヤイガ	ヤウ
ワカルサメ	ヤウ	トメバ	ヤウ オメムザウ ソデノナミダヤウ

茶屋節

ヲガデノカレラヌ	シユユリテンギヤナシ
アソデノカ	マタ レラヌ サトヤウ オチヤヤオドン
ハイヤ	シホラ ムザウ ヤウ

昔蝶節

ミットメテオケテ	イヤマタヤウ	ニハムカテミレバ	イヤマタヤウ
アヤハベルムザウガヤウ	アノハナコノハナ	ソユル子タサヤウ	

長ヂヤンナ節

シユユリテンギヤナシ	トモモトヨ	チャウハレヤウ	ムザウ	ヂヤンナヤウ
オマンチュノマギリ	ヤウ	ヲガデスデラヤウ	ムザウ	ヂヤンナヤウ

仲節

ケヨノホコラシヤヤ	ナヲニギヤナタテル
ツボデヲルハナノ	サトヤウテバ ツユキヤタゴトヤウ
ハイヤ	イキヤシユガ ムザウヤウテバ

十七八節

ユスズメノナレバ アイチヲラレラヌ

タマコガ子ツカイノ ニヤキユラトメバ

東細節

ヒガシコマヲドリ ワガクナチオチヤイン

ミヤコセドヲドリ ワガノトメガ

シホラヤウ チヤンナヤウ

永良部節

アキゴトニ サヒエヤレ ミレバヤウ

ニハノマセウチニヤウ ウチニヤウ ヤエ

昔嘉手久節

モイコヤウバナコバナヤウ モノモヤウ イヤヌバカリヤウ

ツユハヤウウチムカテヤウ ワラテヤウサギュサ ムザウヤウ チヤンナヤウ

柳 節

ヤンナギハミドリ ヒエヤヤウンナ ヤウンナ

ヤエイヤ ヤエイヤ ヤエイヤ ヤエイヤ

ヤエイヤ ヤエイヤ ヤウンナ サヤウンナ

ハナハクレナ井 ヒエヤヤウンナ ヤウンナ

ヨリテク ヨリテク ヨリテク ヨリテク

ヨリテク テク テク ヤウンナ サヤウンナ

ヒトハタダナサケ

ツムメハニホヒ ヒエ ヤウンナ ヤウンナ

ヤエイヤ ヤエイヤ ヤエイヤ ヤエイヤ

ヤエイヤ ヤウンナ ヤウンナ サヤウンナ

天川節

アマカハノイケニ

ハイヤ シホラ シホラシ アマカヤウ ヒエヤ タイント タイント

アツブヲシドリノ

ハイヤ シホラ シホラシ アマカヤウ ヒエヤ タイント タイント

オモヒバノチギリ

アノムザウヤウ

ヨソヤ シホラ

タガイニ シラヌ ハイヤ シホラ シホラシ アマカヤウ

ヒエヤ タイント タイント

稻マヅン節

コトシモヅクリヤ アンキヨラサヨカテ

クラニツミアマチ マツミシヤベラ ヤウンナ

長伊平屋節

トリノイヒヤ ヤウ ムザウ ダケヤ ウキアガテド キウ ムザウ ミユル

アツデウキア ヤウ ムザウ ガユル ワタマコガ子 ムザウ ヤウ

通水節

カイミヅノヤマヤ ヒチュリ コエテシラヌ

ノリウムマトクラト ヌシト ヤウ ミチヤリ

サヒヤレノ ヤウ ムザウ シホラドヤウ ミボシヤ

本伊平屋節

ステルミガヤウ ムザウ イノチ ツユホドモヤウ ムザウ オマヌ
アチヤヤハハヤウ ムザウオヤノ ナキユラトメバ ムザウ ヤウ

比屋定節

ゴシヤウノナガタビヤ イキボシヤヤナイラヌ
ハハノタメヤテド ホコティキユル

東江節

アガリアカガレバ ヨノアケントモテ ヤウ ソレ
ツキドヌチヤガユル コヒシヤハン シホスガヤウ

伊野波節

ニユハノイシコビレ アノムザウヤウ ムザウツレテノボル アノムザウヤウ
ニヤヘモイシ ハイヤマタ コビレ アノムザウ トサハアラナヤウ

仲風節

サア カタイヤウタヤ カタイタヤ ツキノヤマノハニ ヤカラ
カカル ヤウ マデヤウテバ ヤウデモ ハイヤウ

述懷節

サラバタチワカラ ヤウ ヨソメナイヌウチニヤウ
ヤガテアカツキノ トリモナキユラヤウ

赤田風節

サア カタイタヤ カタイタヤ ツキノヤマノハニ
ヤカラ カカルマ シタレガ デモヤウ

今風節

サア ヤウ カタイタヤ カタイタヤ
ハイ ツキノヤマノハニ
ヤウテバ カカルヤウ マセツヨマテ デモヤウ
マヘノマウヤ ハイサシテ ムダフ ヤウ

(工工四 下巻)

于瀬節

サトトメバノヨデ ヤウ イヤデイフメオヤド
フユノヨノヨスガ ヤウ タガヒニ カタヤベラ

子持節

タルヨウラメトテ ナキユガハマチドリヤウ
アハヌツレナサヤ ワミモトモトモニ ヤウ

散山節

マコトカヤジツカ ヤレ ワキモホレボレト

子ザメオドロキノ ユメノココチ サユ ヤウンナ

仲風節

サア マコト ヤウ ヒツノ ウキヨサメ
ノヨデイコトバノ ムザウ ヤウ アハヌ ヤウ
オ シホラ ヤウ キヨガ ハイ

述懷節

ヲガデナツカシヤ ヤウ マヅセメテヤスガ
ワカテオモカゲノ タタバキヤシユガ

ヨシヤイナウ節

トカゴシノヨアメ ナソレ クサバウルハシユス シヤント シヤレバ ヨシヤイナウ

七尺節

ナナヨミトハタヘン カスカケテオキユテ
サトガアカイズバ子 ミショヨスラニ サユヤウンナ

揚七尺節

ナミダヨリホカニ イコトバヤナイラヌ
ツメテワカレヂノ チカクナレバ サユ ヤウンナ

白鳥節

オ子ノタカ アシタリノ トモニヤウ シロトヤガヰチヲ
シロトヤヤ アシタリノ アラヌヤウ オメナイオスジ

立雲節

アガリタツクモヤ ヨガホシニユクユイ
アヌビシニユクユル ハタチミヤラベ ヤウ

百名節

キヤタンマウシギヤ子ガ ウタゴエ ウチヂヤスハ
ナカベトブトリモ ヨドデキキユサ ソレ ヤウ

古見之浦節

オシツレテ タガヒニ ヤウ ソレ ハナノモト ハレ シノデヤウ ソレノ
ソデニニホヒ ウッチ ヤウ ソレノ アヌヌブ ウレ ハレ ウレシヤヤウ ソレノ
イツモハナヤサカリ ヤウ

屋慶名節

オヤノタメシチヤル キモノアダナラヌ イユノシ
カミノオタスケノ アルガウレシヤ イユノシ

伊豆味節

キクミシチモドル ワガヤドノツトニ
アタラハナヤテモ チュエダヲタル ヤウシホラヤウソレ チュエダヲタル

サアサア節

イソヂタチモドラ ツキモナガメタエ サア サア サア

サトヤワガヤドニ マチュラダイモ ダイモノ サア サア サア

浮嶋節

アズビボシヤアテモ マドニアズバレメ
シユユリテンギヤナシ オヨワイヤコト ハレガコノサンサ ハレガコノサンサ
オヨワイヤコト

前之濱節

ヤエイ ヤエイ マヘノハマニ マヘノハマニ
ユキアメノサフユイ ヤエイサ
ユキアメヤアラヌ ユキノマゴメ

與那原節

カレヨシノアズビ ウチハレテカラヤ
ヤエイソレ ソレノ ヨノアケテテダノアガルマデモ
アソレアシビヤウシ テビヤウシ ウチハヤシ
ヲドリハ子 アズブウレシヤ

遊子持節

イヤウイ イヤウイ ナクナ ャウ
ワガアジノトビミショ ワガアジノマイミショ
ムツマタノクラニ ャウ ヤツマタノ ウチニ ャウ
イムヂニ グカノシタニ ャウ アハヅカノ ウチニ ャウ
オキブルミ シチャインヤウ オキザルシ シチャイン ャウ
子ナシオキテナクナ ャウ
ナカナレバクイユン ャウ アズバハドクイユン ャウ

坂原口説

ヤエイ ヤエイ カミヤホトケモ マモリテタマヘ
コンドヒノモトナ ハヤノボル ハヤノボル
コンドヒノモトナ ハヤノボル

荻堂口説

ホクザングヅリノソノトキ モトブタイハラ
ナキジングスクニ イクサオショセ

揚古見之浦節

ウチナラシ ナラシ ャウ ソレノ
ヨツダケハ ナラチ ャウ ソレノ
ケフヤオザ イムヂテ ャウ ソレノ
アズブウレシヤ サトノシ ャウ ソレノ
イムヂテアソブウレシヤ

蝶小節

ソレ アガリウチムカテ トビウル アヤハベル
ソレ マヅヨマテハベル イヤリワナイ タノマ

東里節

ユタカナルミヨノ ヤウ ソレ
シルシアラハレテ ヤウ シホラヤウ

大浦節

マコトナニタチユル シホヤノバンドコロ
ナカヤマヤコシヤテ ミナトマヘニ

世榮節

ケヨノイカラシヤ タガスイカラシユガ
シユユリテンギヤナシ オヨワイヤコト ヤウンナ
シユユリテンギヤナシ
シユユリテンギヤナシ オヨワイヤコト ヤウンナ

垣花節

トキハナルマツノ カハルコトナイサメ ヤウシホラヤウ ジヤンナヤウ サア
イツモハルクレバ イロドマサル サア ヤウシホラヤウ ジヤンナヤウ

沉仁屋久節

グスクノマヘノ イチユビヤ
ヤノモノナレヤウ イチユビヤ デンニヤク
ワスタガ テルガマツクテ
ムイムカ イチユビヤ
ヒヤルガ デンニヤク

揚沈仁屋久節

アジソイガオ子ノ トナカラシヂレバ サヂニヤク サ
ナミハオシソヒテ ハルガキヨラサ サヂニヤク

高襦久節

タカ子クニノボテ マハイムカテミレバ ササ
カタホブ子ダイメバ マホドヤユル
カタホブ子ダイメバ マホドヤユル

揚高襦久節

タカ子クニノボテ マハイムカテミレバ ササ
カタホブ子ダイメバ マホドヤユル
カタホブ子ダイメバ マホドヤユル

スキ節

セツセツガナレバ キクサダイモシユリ
ヒトニウムマレトテ ワオヤシラ子 ハレヤウ

池ンタウ節

ハルヤノモヤマモ ユイノハナザカリ
イキスユルソデノ ニホヒノシホラシヤ

打豆節

ウチマメトママメ ワムゴハニカイグハチ
アソビニヤノカズニ シダチムヂラ
ヤエイソレサテモ シホラヤウ

與那節

ヨナノタカヘラヤ アセハテドノボル
ムザウニオメナキバ クルマトウバル
ヤエイソレ サテモ シホラヤウ

久米ハンタ前節

サ クメノ ヤウ ゴヨ ヤウ ノマツ
サ シタエ ヤウ ダノ マクラ ソレ ヒエヤマタ
サ オメワ ヤウ ラベ ヤウ ムゾウヤ
サ ワウデ ヤウ マ克拉 ソレ ヒエヤマタ

江佐節

ヤエイヤ ヤエイヤ カレヨシノオ子ニ エイサ
カレヨシハノセテ サ シハノセテ
ヤエイヤ ヤエイヤ ナミモオシソヒテ エイサ
ハルガキヨラサ サ ハルガキヨラサ
ヤエイヤ ヤエイヤ

湊くり節

カサニオトタテテ フタルナツグレモ
ナマヤウチハレテ テダドテユル ヤウンナ
ナマヤウチハレテ
ナマヤウチハレテ テダドテユル ヤウンナ

清屋節

アタイヲノナカゴ マシラヒキサルチ ササ キヨラヤ キヨラヤ ホコラ

本大浦節

オメゴハトリモドチ テキウタントモテ
アワレアキンドニ ヤツレイムヂル ソレ ヤツレ ヤツレイムヂル

ハヤリグワイニヤ節

ケヨノイカラシヤ オナイ タガスイカラシユガ
サオナイ キヨラヤ ホコラ オナイ
シユエリテンギヤナシ オナイ オヨワイヤコ ヤコト
サオナイ キヨラヤ キヨラヤ ホコラ

宇地泊節

ウチドマリマサゴ マタ テダドマギラシユル
オツキマギラシユル マタ ハマノマサゴ オナイ アソビユサヤウ

綾蝶節

カニアルオザシキニ オソバヨテオガデ ワドヤレパワドイ ツデドミヤベル
 ワドヤレパワドイ ツデドミヤベル
 ワドヤレパワドイ ツデドミヤベル
 ワドヤレパワドイ ツデドミヤベル

津堅節

カツレンノ ヤウ アジヤ ヤウ ダンヂュ ヤウ トヨヤウマレル ヤウ
 タケホヤウドモ ヤウ スガタ ヤウ ヒトニ ヤウ カハテ サユヤウンナ

高離節

タカハナレ シタレノヤウムザウ シマヤ ハレ モノシラシドコロ
 ニヤモノシヤ シタレノヤウムザウ ベタン ハレ ワタチタバウレ

スズ節

メグミアルミヨノ アシホラヤウ ハルカゼニナビク
 アヲヤギノイトヤ タミノスガタ

伊集旱作田節

ランノニホヒゴコロ アサユオメトマレ ヤウ シタレノ ヤウムザウ ヤウ
 イツマデモヒトノ ヤウ ハレ アカヌゴトニ

伊集之木節

アノ イヂヨノ ヤウ ハナヤ ヒエヤルガ アシタレノ
 アカ ギヨラサ サキヨリ サシタレノ ヤウ
 ワミヌモイヂヨ ヤウ ヤトテ ヒエヤルガ アシタレノ
 マシラ サカナ サシタレノ ヤウ

シャウンガナイ節

ケヨヤオイキヤイヲガデ イロイロノアズビ ササ シヤウンガナイ ソレ シヤウンガナイ
 アチヤヤオモカゲノ タツヨトメバ ヤウンナ ササ シヤウガナイ ソレ シヤウンガナイ

シホラア節

ナガメテモアカヌ ヤウ ハイヤウ シラキクノハナノ ヤウ
 ツユノイロソヒテ ヤウ ハイヤウ サチャルキヨラキヨラサ ヤウ
 ハイヤウシホラヤウ ハイヤウ シホラヤウ

口 説

イヒヤドタツナミ オシソイテ
 ミチノシマジマ ミワタセバ
 シチタウトナカモ ナダヤスク
 モユルケムリヤ ユワウガシマ
 サダノミサキニ ハイナラデ ヤエイ
 アレニミユルハ オカイモン
 フジニミマガフ サクラジマ

早口説

モンニタチヨリ ウカガヘバ ヨウシンキビシク ヨマハリノ
ヒヤウシギシゲク オトスレバ シノブオモヒノ イカナラン
ナムヤハチマン ダイボサツ チカラヲアハセテ タビタマヘ
キタカゼハゲシク フクオトニ マギレテイシガキ トビコヘテ
ヒトメモイマハ タエマアル ノキバノシタニ ヨリカカテ
スハヤヒヲカケ クワエンタツ

節口説

サテモメデタヤ アラタマノ ハルハココロモ ハカガヘテ
ヨモノヤマベノ ハナザカリ

道輪口説

ヒトタビサカヘバ ヒトタビオトロウ ヨノナカノナライ
オモイシルミノ アハレハガナヤ スッソハムスンデ カタニウチカケ ヤツレイデタル
スガタコトバモ イマニヒキカヘ シマノシマジマ サトノサトザト メグリメグリテ
ニンギヤウカインシヤウレ ホトケカインシヤウレ ニンギヤウノカズカズ
オキリコボシニ ワカシユニンギヤウ ウムマノリボトケ
コレ、デワラベ ナリコツヅミヤ ホウラフラン ホウラフラン
ホウラウホウラフ ホウツト

大願口説

サクラバナ ウムメノニホヒニ サソワレテ オヒモワカキモ モロトモニ
タチイデ ヤマヤマ カハノベニ ハナミテヒグラシ サテモウレシヤ
チンチルレンサ ハナノイロイロ ツユウケテ サテモミゴト

揚口説

ゲニヤミヤコノ ハルノソラ イズルヒカゲモ ノドカニテ
サクヤサクラニ ウムメノハナ

シホライ節

ケヨヤオイキヤイヲガデ ヤエシホライ
イロイロノアツビ ヤエユヤウンナ

松本節

シシヤマリツレテ ャウ オナイ コナイ
ヲドリヤウハ子アツブ ャウ オナイ コナイ
ワミ ャウドシツレテ ャウ オナイ コナイ
アソブヤウウレシヤ アメシホラシノヤウ

萬歳カウス節

マンザイカウスヤ ヤンザイカウスヤ ニグワツオホダテ ホマツリヤ
テンヨリクダリノ ナンノヒドリヤ ヨイヒドリ
マイヤオブサイ イシャガツサイ

テンヨリクダリノ ヌノオリジヤウズノ アヤオリオトコノ
ニシキノキンラン カラヲノキンラン
ヲトコノチヤウジヤノ ニュマノチヤウジヤノ
ニホリヨハレテ ヤンザヨハレテ ヤンザヤンザト
ウムマノテトフレバ イチダントホメラレタ
ケヨモアチヤモ オヨワイゴト

ウフンシヤリ節

トナリノ ミミキリ ハナキリ グ子ヒキミヤガ メハゲ
クビシロ ウワインチユニ アラカヂクハレテ
アベラジ ヲラバジ トノカジ オメイリヤ サトチユイドウヤウ
サトガモノイクラシヤヤ ノニタテルガ ヤエ
フダノヂヤゲナヤ

サインソル節

ヤンザイカウスヤ ウムマイシヤ ガイジマウ タシシマウタ
カニヤイルモノ オメカケタメ ヲカシヤバカリ
シタレガ ツヤウン ツヤウン ャ ツヤウン ツヤウン

伊計離節

イケバイケ ヤウ ハナレ ヤウ
ハレモドテ バマ ヤウ ハイヤウ ヒヤン ザ ヤウ

亀甲節

テンノブレボシヤ シニヤガウエドテユル ソレ マンザイ テユル
越来節

ゴヘクヤマギリニ アタルコト テクゴフサトガ シヤルクトノ
南嶽節

ケヨヤオイキヤイヲガデ ヤウササ イロイロノアソビ ヤウ ササ
キヨラヤウイ キヨラ ヤウイ ケヨスデ ナンダケヤウ
アチヤヤオモカゲノ ヤウ ササ タツヨトメバ ヤウンナ ササ
キヨラ ヤウイ キヨラ ヤウイ ケフスデ ナンダケ ヤウ

ションドラフ節

ションドラウ シヨドンナガハマニ ヤウ
アシヨンドラウ ウチヤイヒクナミノ ヤウ
アシヨンドラウ シヨドンミヤラベノ ヤウ
アシヨンドラウ メワライハグキ
ワタチヤンダウ アシヤイ ウケトタサ

ソレカン節

アンダカウテタバウレ ジハモカウテタバウ オムマサメ
ステヲトノミルメ ミナデシヤベラ ソレカン

ヤレコノシ節

オシツレテ タガイニ アズビボシヤアスガ
ムチヤリ ニホヒダカサ ヤリコノオナイ ワカテアズバ
アソビウサ ヲドユサ ヒヤウシノ ヤリコノシ ヤリコノシ

カンキヤイ節

カタキウチトタル ャウ カンキヤイ
ケフヨノホコラシヤヤ ヒエヤキシヤウヲドリ

仲里節

キケバナカザトヤ ヨリテク ヨリテク

鳴尻天川節

ウチナラシナラシ アノムザウヤウ
メマユギヨラサノヤウ シタレノヤウ ササ ハイヤ イヤツサ

早嘉手久節

カデク ャウ オメナベガ ャウ ハイヤ タイン シトルト タイン
タイン トン タイン トルルン タイン
トンタイン シトルト タイン

安波節

カレヨシノアズビ ハレ ウチハレテカラヤ

テンヤウ節

ニハノイトヤナギ ャウ カゼニサソハレテ
ツユノタマミガク ャウ ジフゴヤテルオツキ テヤインヤウ テヤインヤウ
シトルトテヤイン
ハレヤウノ ヨイヤナ

勝連節

ササ カツレンノシマヤ ハレガマタカツレン ノシマヤ
ヒエヤヤウ カヨイボシヤアスガヤウ

ジッサウ節

オモユラバサトマヘ ソレ シマトイティマウレ
シマヤナカグスク ソレ ハナノイシヤダウ ハラジツサウ マア
オレナンゾメカナヤウ

イヤリ節

ウラタノマハイカゼ ャウ コトイヒツク オヒルキヤイ
オホイシヤゲ アルジシマ フキトウセ ャウ ハイフキトウセ ャウ

アカケナ節

アカケナ ャウ トリゴハガ ハヤタヘバ ャウ
ウタテド ハヤタヘバ ャウ
ウタテド イソレ サアソレ

小濱節

コバマテルシマヤ グンヂヨトヨマレル
オホタケハコシヤテ シロハママヘナチ ヤウンナ
オホタケハコシヤテ オホタケハコシヤテ シロハママヘナチ ヤウンナ

石之屏風節

イシノ^{音名}ブタテテ ソレ ナナエヤエウチニ
イツヨマデフナキ ソレ モタヘサカヘ ヤウンナ

赤馬節

アカムマノ ヤウ イラシユザ ヒエヤルガヒエ
アショツヤガ ドギミヤク ヤウ ハレノ ヒエヤルガヒエ

タカクジ節

イラサ子サケ^{音名}ノヒ ヤウ ドケサ子サ ヤウ コガネヒ ヤウ

鳩間節

ハウトマナカモリ ハイノボリ コバノシチャ ハイノボリ
ハイヨヤウテバ カイダキ シトルト タインヤウ サテミゴト

布晒節

テンギヤナシゴヨノ ソレ ハタヨミノミヌノ

白保節

アサユ キモトメテ ヲガミユタルミヌノ ヨラテク ヨラテク ヲドリアソバ

月夜演節

チクヤハマダケニ ヤウ ムザウ キシノラノモメン ヒヤソレ
モメンバナツクテ ヤウ ムザウ モメンガスカケテ

ナカラタ節

ナカラタノマヘヤ ヤウ ハナレツツアハモ ヤウ

(以下唐三味絃説云々は略)

解題

県立博物館には県民各位から戦後寄贈された琉球音楽の楽典（工工四等）が収納されているが、その内容の紹介や研究については十分やられていない。理由は当館にその専門家が居なかつたこと、関係者が知らなかつたという点にあるようだ。私も音楽の専門ではないが、楽典に記入されている琉歌を文学の面から検討することが目的で今回発表することになった。

とりあえず野村流関係の資料によって歌詞を抜き出したわけであるが、歌詞を検索するうちにいろいろな課題が出てきた。最終的には「屋嘉工工四」、「伝知念績高工工四（一名芭蕉紙工工四）」との比較も必要になってきたが、今回は時間の制約上比較検討は無理なので当工工四を通して得た課題のみを箇条書きするにとどめる。

1. この工工四の中巻と「伝知念績高著工工四」と同一の目次であること。ただし内容と形式については当中巻は合理的になっていること。

2. 当工工四の編集には明らかに舞踊や組踊の地謡用のものとして利用できるようになっていること。
3. 当工工四はひとり音楽、文学の面から研究資料として大切であるばかりでなく、歌詞のカナ表記からして言語学の面からも重要なものであり、今後が期待されること。
4. 沖縄本島の歌を主にした古典音楽に新たに八重山、宮古の歌が加えられていく経過がよくわかることなどである。

以上のことと祥述する。

1について

伝知念績高著「工工四 一名芭蕉紙工工四」は当館に保管されているが、表紙とその次のページも幾らかは欠になっていて節名は首里節からはっきりしている。首里節の前に1ページ事の楽譜がついておりカナ書きからすれば「ヂヤンナ節」であろう。この伝知念績高著の工工四の首里節以下の歌の数と順序を比較するとそっくり同じであるから伝知念績高著の工工四にもこれと同じく目次がつき、最初に「作田節」次に「ジヤンナ節」があったと思われる。沖縄大百科辞典で比嘉悦子は知念績高の項で知念績高は「古典曲 163 曲を上下 2 卷の芭蕉紙にまとめた「工工四」を書き残したといわれるが、今は所在が明らかでない」と伝承に立脚したことを述べているが、上下 2 卷でなく野村工工四と同じく 3 卷であった可能性が多い。

前にも述べた通り伝知念績高著工工四と野村工工四是節数と順序は同じだが、後者の方が前者に比べて合理化されていることから編集時期は明らかに異り、成立は屋嘉比朝寄工工四、伝知念績高工工四、野村工工四の順になる。なお同じ考えは池宮正治氏も述べている。

2について

野村流工工四が舞踊や組踊の地謡用も兼ねて編集されているのは、

ア) 首里節とシヨドン節が続いている→女踊「しょどん」

柳節と天川節が続いている→二才踊「前之浜」

前之浜節と与那原節が並んでいる→二才踊「前之浜」

シヨンダフ節、ソレカン節、ヤレコノシ節が続いている→打ち組踊「しょんだう」

イ) 本伊江節の歌詞が「拾てる身が命」になっている→組踊「孝行之卷」。

千瀬節の歌詞が「里と思ばのよで」になっている。→組踊「執心鐘入」

屋慶名節の歌詞が「親の為しちやる」になっていて→組踊「孝行之卷」

荻堂口説の歌詞が「北山崩れのその時」になっていて→組踊「花壳の縁」

大浦節の歌詞が「まこと名に立ちゆる塩屋の番所」→組踊「花壳の縁」

池ンタウ節の歌詞が「春や野も山も百合の花ざかり」で→組踊「手水の縁」

本大浦節の歌詞が「思子取り戻ち敵討たんと思て」で→組踊「大川敵討」

津堅節の歌詞が「勝連の按司や」で→組踊「二童敵討」

早口説の歌詞が「門に立寄り伺へば」で→組踊「義臣夜討」

道輪口説の歌詞が「一度び榮へば」で→組踊「義臣夜討」

3の仮名表記について

「子」の表記について

作田節	ソユル子タサ	高橋久節	タカ子クニノボテ
十七八節	タマコガ子ツカイノ	揚高橋久節	タカホブ子ダイメバ
長伊平屋節	ワタマコガ子	江佐節	カレヨシノオ子ニ
七尺節	サトガアカイズバ子	松本節	ヲドリハ子アソブ
白鳥節	オ子ノタカトモニ	ウフンシヤリ節	グ子ヒキミヤガ
百名節	キヤタンマウシギヤ子ガ	タラクジ節	イラサ子サケフノヒ
遊子持節	イムニヅカノシタニ 子ナシオケテナクナ		
揚沈仁屋久節	アジソイガオ子ノ		

以上のように表記として「子」が特に用いられている。これはたんに変態仮名ふうに字を当てたのではなくひら仮名の「に」とこの「子」では発音が明確に違うことを表示したものと思われる。特に遊子持節では稲の発音が本来は「イ子」だったが現在は「ムニ」であるということを書き分けている。故に「子」は「ンニ」と発音したと思われる。

ゴハ ジフ トフ カフの表記について

打豆節	ワムゴハニカイクハチ	テンヤウ節	ジフゴヤテルオツキ
本大浦節	オメゴハトリモドチ	万歳カフス節	マンザイカフス
アカケナ節	アカケナノトリゴハヤ		ウマノテトフレバ
ションドフ節	ションドフ シヨンドウ		

以上のような表記になっている。これ等の表記は現在はゴハ→グワ ジフ→ジウ トフ→トウ カフ→カウと表記されているものである。旧仮名遣いによる表記法なのか、あるいはその通りの発音をしたからそう表記したのか興味のある問題である。

その他課題とする表記と問題点

柳 節	ヤンナギハミドリ ハナハクレナヰ	早 口 節	ヒトメモイマハ タエマアル
白 鳥 節	シロトヤガキチヲ	道輪口説	アハレハガナヤ
伊豆味節	チユエダヲタル	サインソル節	ガイジマウタ
サアサア節	ツキモナガメタエ	石之屏風節	ナナエヤエウチニ
揚沈仁屋久節	トナカヲシデレバ		

以上が表記として興味のあるところである。問題点としてサインソル節の歌詞がヤンザイゴーシヤを使ってあり京ノ小太郎がチクタンバイを使ってないこと。天川節の最後の句を歌う時にはママカヤウと歌いアマガハヤウとは歌わないこと等である。白鳥節もシラトヤでなくシロトヤと明記してある。

パソコンによる博物館資料の整理の試み

当山昌直

はじめに

情報化時代とされるなかで、様々な分野でコンピュータが利用、又は利用の計画がすすめられているようである。しかしながら、博物館においては、その活動内容の複雑さもあって、進みつつある情報化時代への対応が最も遅れていると言ってもよいではないだろうか。博物館活動は、展示、資料の収集・整理保管、調査研究、教育普及の4本の柱からなっている。生涯教育の場としての博物館活動が重要視されてはいるが、地方の博物館においては、人員や予算等で活動が限られ、それにともなう内面的な多くの問題を抱えているのが現状であろう。

博物館は、多くの資料を収蔵しており、それに伴う情報量は膨大なものがある。しかしながら、博物館の学芸員は資料の整理に多くの労力を投入しても資料の整理が追い付かず、人員の限られた所では納得のいく整理状態まで行き着くことは困難な状態にあるといえる。同時に、整理はさていても、それを必要に応じていつでも取り出せるように、いわゆるデータを活用するところまでには至っていないのではなかろうか。

このようななかで、博物館活動の中でも特に博物館資料の整理について、地方博物館の現状を考慮しながら、パソコンを利用した整理方法として、データ入力の形態とデータ出力の形態を中心に検討してみた。まだ、暗中模索の状態ではあるが、今後の計画の参考になればと思い、中間報告のつもりで報告する。

材料及び方法

整理の対象とする資料は、沖縄県立博物館の収蔵資料のうちから自然系動物の両生爬虫類の標本を例にする。次に、導入したパソコンの構成の概要を記す(メーカー名省略)。

- (1) 本体：QC-10II
- (2) 記憶装置：本体内蔵フロッピーディスク 320 KB × 2 ドライブ
- (3) 白黒ディスプレイ：14インチ
- (4) シリアルドットプリンター：FP-80K
- (5) アプリケーションソフト：日本語処理 G. B. S.

結果および検討

博物館におけるパーソナルコンピュータの利用にあたっては、ハードやソフトの問題について安池(1984)に報告されているので、本報では割愛する。ここではソフトでつくりあげたデータの処理システムについて述べる。システムは、図1のように三つのファイルにわけて方法をとった。

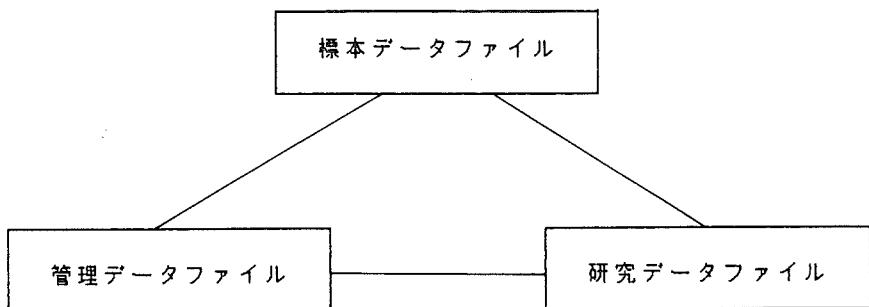


図1 博物館資料データ処理システム

はじめに、ファイルとレコードの関係についてすこし触れておく。博物館で一般的に使用される資料カードに相当するのがレコードにあたる。この同一のレコードの集合体がファイルになる。

ファイルを一つに限ってしまうと、レコードのスペースを大きく取ることになる。資料によっては、データの少ないものもしくは必要としないものもあるので効率が悪くなる。それで、データの利用の目的や用途によって分けることを考えた。種名、採集地、採集者等、標本の基本的なデータが入る「標本データファイル」、提供者や評価など管理に必要なデータが入る「管理データファイル」、体長、雌雄、採集時の状況など細かいデータが入る「研究データファイル」等からなる。したがって、目的や用途によって必要なファイルからとりだせばよいので、データの入力や出力が便利になる。それぞれのファイルは、共通のコードにより連結することができるので、必要に応じて連結し一つのファイルにして利用することができる。共通のコードには、標本番号を用いている。

標本データファイル

このファイルは、標本番号、事務番号(備品番号)、和名、科名、学名、採集地、国、県、島、採集日付、採集者のデータを入力する。ファイルのレコードにあたるものを見ると図2に示す。

登録標本番号 ... [OPM H0411]	事務番号 ... [00000008894]		
和名 ... [オキナワトカゲ]	科名 ... [トカゲ]		
学名 ... [Eumeceles marginatus marginatus]	FAM... [SCINCIDAE]		
採集地 ... [津堅島津堅]	国 ... [JAPAN]	県 ... [OKINAWA]	島 ... [TSUKEN]
日付(年/月/日) ... [77/03/28]	採集者 ... [当山昌直]		

1-8 を選べ

1= 次のレコード 2= 前のレコード 3= 画面のプリント 4=
5= 更新のキャンセル 6= 第一レコード削除 7= 8= 変更メニュー

図2 標本データファイルの例

色々と試してみたが、このレコードの内容は基本的な最低限のデータだけを入力するようにした方が良いと思われた。よく利用するレコードなので、あまり欲張って項目をふやすとかえって利用しにくくなる。このレコードは、シンプルな形態がよいようだ。項目をふやす場合は、ほかのファイルに入れるようにしている。なお、国、県、島の項目があるのは、後でデータを取りだしやすいようにするためにもうけたものである。

管理データファイル

このファイルは、標本番号、事務番号、受け入れの形態、受け入れに関係した人、保存形態、評価・購入価格、メモ等のデータを入力する。ファイルのレコードにあたるものを見図3に示す。

登録標本番号..[OPM-H0411] 事務番号..[00000008894] J
 A: 採集者 B: 寄贈 C: 贈入 D: 交換 E: 寄託
 a: 採集者 b: 提供者 c: 購入先 d: 交換先 e: 寄託者 f: 標本作製者 g: 紹介者
 1: アルコール 2: フォルマリン 3: ハクセイ 4: カンソウ
 入(A,B,C,D,E)..[A] 保存(1,2,3,4)..[1] 評価・購入価格..[0000]
 1 氏名・機関名(分類 a,b,c,d,e,f,g)..[A] [当山昌直] J
 2 住所..[〒903 那覇市首里大中町1-1] TEL..[0988-84-2243] J
 3 氏名・機関名(分類 a,b,c,d,e,f,g)..[] TEL..[] J
 4 住所..[〒] TEL..[] J
 5 氏名・機関名(分類 a,b,c,d,e,f,g)..[] TEL..[] J
 6 住所..[〒] TEL..[] J
 メモ 1.....[] J
 メモ 2.....[] J
 1-B を選べ
 1= 次のレコード 2= 前のレコード 3= 直前のプリント 4= J
 5= 更新のキャンセル 6= 第一レコード削除 7= 8= 変更メニュー

図3 管理データファイルの例

データの入力が手軽に出来るように考慮したが、まだ、検討の余地は十分あると思う。とりあえず、メモの項目をもうけて不十分な点に対処出来るようにした。なお、このファイルは安易に外部に開放するような性格のものではないので、パスワード（暗号）をもうけて、それを防ぐようにしている。したがって、パスワードを入力しなければ作動しないようになっている。

研究データファイル

このファイルは、標本番号、性別、体重、体長等、標本データファイルに記されていない細かいデータや専門的な内容のデータを入力する。ファイルのレコードにあたるものを見図4に示す。

図4 研究データファイル

資料となる標本によって形式は異なってくるが、採集時における細かいデータや写真の有無、生息地の状態、報告されている文献等を入力するようにしてある。また、採集地の地図上の位置をコンピュータで処理すること、および将来性を考慮して、環境庁で行なっている「みどりの国勢調査」で使用している地図のメッシュコードを利用することにした。まだ、検討の余地は十分あると思うが、とりあえずメモの項目をもうけて不十分な点に対処出来るようにしている。標本によっては、このレコードに記入出来るようなデータが全く無い、かもしくは少ないのであるので、標本データファイルと研究データファイルを分けた効果がここにもあらわれる。なお、このファイルにもパスワード（暗号）をもうけてある。

作業のメニュー

これまでに述べたファイルをつくった後、作業のメニューを作成した（図5）。記号Bを押すと標本データファイル、Cを押すと管理データファイル、Dを押すと研究データファイルがオープンするようになっている（CとDはパスワードが必要）。F以降はデータの出力に関するものなのでここではふれない。

仕事を選んで、記号を押せ

- | | |
|--------------|-----------------|
| A. ディスクを交換 | B. 標本データの記帳 |
| C. 管理データの記帳 | D. 研究データの記帳 |
| E. 和名検索レポート | F. 島名検索レポート |
| G. 採集者検索レポート | H. FAMILY検索レポート |
| I. 学名検索レポート | |

A-I を入力

図5 作業メニュー

利用の実際及び発展性

まず、これまでカードで整理していた標本のデータをコンピュータで整理することにしたい。暫定的に必要に応じてカードも作成する。今後の、発展についてはまだ考え方を整理していない。とりあえず、コンピュータにデータを入力した後に標本の整理を行ないたい。

一般的には、標本を整理した後に台帳やカードを整理するか、もしくは標本の整理しながら台帳やカードを整理するはずである。前者の場合は、標本とカードが一致しなかったり、またどの棚に標本があるのか掌握できなかったりすることがおこりえる。後者の場合はやや良いのだが、いずれにしても人員や時間を要するし、作業内容も細かくなり、標本整理と台帳・カード整理に多くのエネルギーを費やすことになる。そこで、コンピュータにデータを入力した後で目的に応じた形態で整理されたデータを取りだし標本を整理するわけである。図6のメニューはデータの出力用につくられたものであるが標本整理のための作業も含まれている。

- 仕事を選んで、記号を押せ
- | | |
|--------------|----------------|
| A. ディスクを交換 | B. 島名検索レポート |
| C. 採集者検索レポート | D. 学名検索レポート |
| E. 県名検索レポート | F. 標本整理ラベル(種別) |
- A-F を入力

図6 作業メニュー

85/01/10

1

学名検索

NO.	DATE	COLLECTOR	LOCALITY
H0022	73/05/06	当山昌直	渡嘉敷島
H0023	73/01/14	当山昌直	伊是名島仲田
H0033	73/02/25	当山昌昌	久米島
H0034	72/03/15	当山昌昌	伊平屋島
H0035	73/05/06	当山昌昌	渡嘉敷島
H0036	73/05/06	当山昌昌	渡嘉敷島
H0059	73/01/14	当山昌昌	伊是名島仲田
H0063	71/03/19	上原幸	沖繩島那霸市
H0064	71/06/18	永村清	沖繩島那霸市
H0065	72/03/15	当山昌昌	伊平屋島
H0409	77/03/27	当山昌昌	津堅島
H0094	73/03/27	当山昌昌	西表島仲田
H0107	73/01/14	当山昌昌	伊是名島仲田
H0109	73/01/14	当山昌昌	伊是名島那霸市
H0110	71/03/12	山内重	沖繩島那霸市
H0111	73/01/14	当山昌昌	伊是名島仲田
H0112	71/05/19	永村清	沖繩島那霸市
H0136	71/03/19	名城満	那霸市
H0137	79/08/24	当山昌昌	屋我地島
H0138	73/03/20	当山昌昌	宮古島松原
H0139	72/03/08	当山昌昌	久米島
H0141	72/10/03	池原貞雄	南大東島
H0147	72/07/25	当山昌昌	西表島
H0150	72/07/24	当山昌昌	伊是名島仲田
H0162	73/01/14	当山昌昌	伊平屋村田名
H0163	72/03/17	当山昌昌	伊平屋島
H0223	75/08/18	当山昌昌	西表島
H0224	75/08/18	当山昌昌	西表島
H0225	75/08/18	当山昌昌	西表島
H0236	79/10/03		

図7 標本整理レポート

図6のメニューから標本整理用の記号Fを押すと、図7のようになってデータがでてくる。

図7の種類(ホオグロヤモリ)で検索したデータが印刷されて出てきたものである。この印刷されたのに従って標本を並べていき、標本が入っている箱や棚を整理するわけである。そして、箱や棚には、印刷された図7のデータを張っておき、すぐ目的の標本がとりだせるようになっている。このような整理方法をとると、能率のよさに加えて、レコード(カード)と標本とがより正確に結びつくことになる。これで、はじめに述べたような納得のいく整理状態に近付くことが可能であろう。

以上、ファイルの形態と利用について述べてきた。いずれ、博物館活動の諸分野にもコンピュータを利用できるように考えていきたい。この場合の基本的な考え方として、各学芸員が自由にこなせる、いわゆる「パーソナルコンピュータ」として使用できるようなものにしたい。

おわりに

コンピュータについては素人ではあるが、逆にそれをいいことにコンピュータを利用した博物館資料の整理に挑戦してみた。BASICでプログラムを組んだこともないという、白紙の状態から始めたのが1984年の春であった。ほとんど手探りの状態ですすめられたので独断などからくる思い違いもあると思われる。今後も、コンピュータを利用した博物館活動を考えていきたいので、これを機会に御指導願いたい。

文 献

安池尋幸、1984. パーソナルコンピュータによる簡易言語ソフト利用上の問題点。横須賀市博物館報、(31)：42-44。

絵画三題 一般元良・査丕烈・孫億—

津波古 聰 ★

沖縄の歴史のなかで18世紀は美術工芸の最も盛んな時期であり、王朝文化の最盛期ともいわれている。絵画においては、中国や日本の絵画を消化吸収し、沖縄独自の絵画が成立した時代である。今回当館に殷元良、査丕烈、孫億ら三人の作品が新らしく収蔵された。この三人の画家達は沖縄の絵画の変換を知る上で重要な位置にある。殷元良は王朝文化の最盛期に活躍した唯一の宮廷絵師で、沖縄の代表的な画家である。査丕烈は王朝末期の画家で首里王府最後の絵師といわれている。孫億は沖縄画壇に直接的、間接的に影響をあたえた人物で、彼をのぞいては沖縄絵画の歴史は語れない。



品質形状 絹本着色掛幅装

法 量 本紙 縦100.0 横47.6

落款印章 中山首里殷元良 殷元良印（朱文方印）

廷器氏（白文方印）

制作年代 不詳

(★つはこさとし県立博物館学芸員)

殷元良筆 絹本着色「枯柳水禽之図」

座間味庸昌（唐名殷元良、1718～1767、以下殷元良と記す）は幼少のころより画才があったといわれている。12才のころ、城中に召し入れられ、山口宗季（唐名呉師慶）を師とし画法を学ぶ。いわゆる宮廷絵師として育成されたわけである。そして、国師蔡温より、廷器という字をもらい、さらに尚敬王より「中山首里」、「殷元良」、「廷器氏」の三印を賜っている。乾隆11年（1746）、29才の年に黄冠に叙せられるが、山口宗季はすでに没し（1743年）首里王府の絵師の大役は殷元良に回った。乾隆17年（1752）、進貢使節に加わり、北京大筆者として福州に渡るが、絵画に関する記事は見あたらない。しかし、この大旅行は彼の画法に大きな影響を与えたことは確かなようだ。

彼の作品の中で「鶴の図」や「神猫図」（伝殷元良）と「雪中稚子の図」、「花鳥図」は画風が異なり、後者は旅行後の作品の思われるが、当時中国より多くの絵画が入ってきており、それらの絵をもとにして、模写も行なわれているので、いちがい

に旅行後の作品とはいえない。両方とも中国院体画の形式を踏まえてはいるが、前者の「鶴の図」、「神猫図」は大和絵や明時代の絵画の影響が見られるものの、福州絵画に特徴的な花鳥画・山水画の画風の影響は稀薄である。ともかく彼は中国旅行を体験することにより、中国院体画に接し、直接その画法を学び帰国した。その後、彼の絵には装飾的な面も現われ、山水図や花鳥図が多くなっていくが、また変化する画法や筆致にも注目する必要がある。彼が中国へいき、そこで何を見、何を体験したか知るすべはないが、とにかく彼の絵はある意味では装飾的な面を持ちながら、南宗的画法を踏まえて発達していく。

殷元良の作品で現存確認されている絵画は「花鳥図」、「雪中稚子の図」、「竹の図」(1762年制作)〈以上三点はいずれも県指定で当館所蔵〉、「山水図」(1753制作。正木美術館蔵)、「山水図」(1754年制作。個人蔵)、「鶴図」(1748年制作。大倉集古館所蔵・国の重要美術品に指定)、「鶴図」(個人蔵)、殷元良の作品のなかで現在確認されている唯一の人物画といわれている「寿老人」(個人蔵)の8点である。

本図は今回新たに確認され、昭和59年度予算で購入し、当館に収蔵されたものである。箱の表に「枯柳水禽之図」と墨書しており、絹本着色の掛幅装である。絵は画面の右下より上方へ柳の枝がのび、左側へ大きく弧を描いている。芙蓉と枯枝が同位置から出ており、芙蓉は画面の中心にある。枯枝は下方にのび、その上には鳥が一羽、水草をのぞくように止っている。この水草の描写によって水の流れを表現しており、直接には水の描写はされていない。枯枝の鳥はこの水の流れをのぞくように止っている。鳥の表情は周囲のしづかな情景によって目線のするどさが強調されている。芙蓉は胡粉が用いられているが、朱色が見られるところから、夕刻、芙蓉の色がかわる様子を描いたのだろう。そして、葉は裏表の色調がみごとにあらわされている。柳や水草が淡い色調によるものに対して芙蓉、鳥の描写は写実的である。本図は柳、芙蓉と鳥そして水草の3つの動きによって構成され、その描写は柳や水草と芙蓉、鳥とはわずかに異なり刻々と変わる時間と鳥の瞬時の動きをつかまえ描いている。前述したように彼は中国旅行を境目して画風が変る。本図はちょうどこの転換期の作品ではないだろうか。

査丕烈筆 紙本着色「牡丹の図」

仲宗根真補（唐名査丕烈、雅号・嶂山）は1865年、絵師となり筑登之座敷につくが、廃藩置県はすでに目前にせまっていた。その直後、1874年に描いた絵に「花鳥図」（長嶺将秀氏所蔵）がある。菊と木の枝に止まっている二羽の鳥を描いたもので、淡い色調の掛幅装である。1984年の作品としては、熊本分遣隊が首里城に駐屯していたころ描いた「首里旧城の図」（当館所蔵）がある。遠近法やボカシによる立体的な描写がところどころに見られ、西洋絵画の画法が見受けられる。この絵は美術的、歴史的にも貴重なものであり、当時の首里城が克明に描かれている。

仲宗根真補は1843年、首里に生まれている。俗称「カンプータンメー」とか「ナカゾネタンメー」と呼ばれて、首里の阿丹川付近に住んでいたという。彼が絵を描くとき、障子を締め切って描いたともいわれ、また、数多くの絵を制作したようだが、その詳細は不明である。琉球王朝最後の絵師ともいわれるが、その晩年も不明である。本図は昭和59年に長嶺将秀氏の御好意により寄贈されたものである。破損がひどく制作年代などは明らかでないが、査丕烈の絵の特徴がよくあらわれているものと思わ



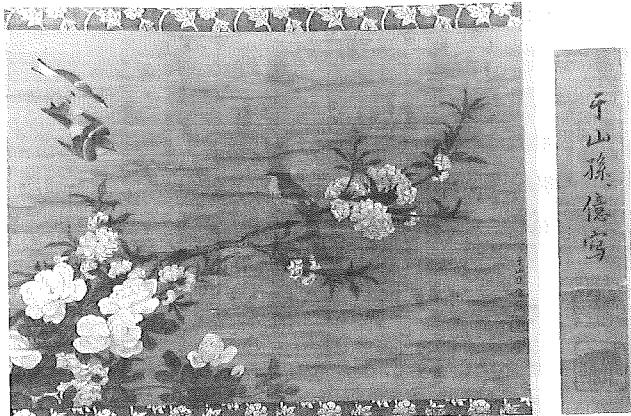
品質形状 紙本着色 掛幅装
法 量 本紙 縦112.0 横45.0
落款印章 査丕烈 査丕烈(白文方印)
嶂山印(朱文方印)
製作年代 不詳

れる。「花鳥図」、「首里旧城の図」とは異なり、のびやかに牡丹の図を描いている。「首里旧城の図」はその絵の性格上首里城を正確に描写しなければならず、絵自体かたい印象を与える。しかし、この図は南宋画の影響がつよい当時の絵画のなかでは鳥瞰図を用いて、特異な構図にしている。また、「花鳥図」は伝統的な技法をふまえた絵画であるが、本図「牡丹の図」のほうが査丕烈本来の絵ではないだろうか。筆致が力強く牡丹の図をこれほど大きく、象徴的に描いた絵はないだろう。牡丹を朱で描き、輪郭線がなく彩色のみで表わされている。葉脈は筆で描いてあるが、色は葉脈を気にせず彩色されている。中国より受けついできた沖縄の絵画の技法は、ここでは薄らぎ、淡彩画のような色調のなかにも力強さがある。本図を見ていると、彼は静かに世の移り変りを見ているように感じてならない。

孫億筆 絹本着色「牡丹小禽図」

中国の伝統的な絵画には「山水画」、「花鳥画」の二通りある。このうち花鳥画は宋・元明時代を通じて庶民の中で育ち、また、日常生活の身近かなものが主題となって描かれた。清初では没骨法による新しい写生体花鳥画が生まれ、福州においては福州花鳥画として発達し、写生的または装飾的な絵が描かれた。福州にはこのような花鳥画を受け入れる要素があり、また古来より多くの花鳥画の画家を生んだ。孫億は長州（江蘇省吳県）の出身で、字を惟鑑（惟年）、号は於山（于山）あるいは于峰道者と称した。花鳥草虫がたくみで、山水人物をよくしたという。彼は職業的な画家の一面ももち、いわゆる「売絵」も、かなり描いていたといわれている。しかし反面教養も深く、技術的にもすぐれた画家であったという。1704年、山口宗季が渡闈し、謝天游、王調鼎、孫億三氏に師事したといわれ、うち孫億には多大な影響を受けたようだ。このように孫億は山口宗季から殷元良へと沖縄の画壇に直接・間接的に影響を与えている。孫億の絵については江戸上りのさい献上品として首里系家譜の中にあらわれてくる。家譜の記事は次のとおり。

『翁姓家譜』（伊舍堂家）四世 翁自道伊舍堂親方盛富 尚貞王世代 康熙四十四年（1705）乙酉三月二十日因少将吉貴公紹承國統尚氏越來王子朝奇為慶賀事奉使赴薩州時奉命為大親（中略）聖上



品質形状 絹本着色 掛幅装

法 量 本紙 縦40.0 橫55.1

落款印章 于山孫億写 孫億之印（白文方印）

惟鏞（朱文方印）

制作年代 不詳

召入金御殿深受聖旨并賜御盃及御手拭一条孫億花鳥画二幅（下略）。

康熙四十八年（1709）己丑十一月十一日因將軍家宣公繼承大統為慶賀事尚氏美里王子朝禎赴江府之時為副使（中略）於芝御屋敷恭獻石香盒二個米芾書乙折孫億四季画四張（下略）。

『毛姓家譜』（永吉家）九世毛弘休神村親方盛陳 尚敬王世代。

康熙五十四年（1715）乙未四月晦日就 吉貴公叙正四位向氏大里按司朝央為慶賀使（中略）從聖上遣使賜繪一枚孫億筆也。『楊姓家譜』（長堂家）六世昌憲 長堂里之子親雲上尚敬王世代 康熙五十五年（1716）丙申十月八日從聖上特賜孫億花鳥御

掛物一幅。『向氏家譜』（具志川家）十世諱宣謨 今歸仁王子。乾隆十二年（1747）丁卯四月初六日為慶賀太守宗信公承祧陞少蔣初到薩州並隅州繼豐公致仕事奉命為使者陞王子位（中略）從內院獻御掛物一幅孫億筆。

これら家譜によって彼の絵が、かなり沖縄に入ってきたものと思われる。また、その他の福州絵画も入った可能性も当然考えられる。殷元良は山口宗季からの教えの他に、中国から入ってきた絵画の写本もかなり研究し、描いたものと思われる。当然その中には孫億の絵もあったはずである。

彼の作品は約十点ほど日本本土にて確認されており、沖縄でも二点確認されているが、両者共花鳥図である。本図はこの内の一点で、昭和59年度予算で贈入し、当館に所蔵されたものである。

本図は絹本着色の横長の花鳥図で、現存する彼の絵では比較的あっさりした絵である。左下の方から牡丹の枝がのび、画面中心よりほんのわずか右にずれた所に鳥が止まっている。左上方から二羽の鳥が画面中央の鳥に向い飛んでいる。画面の対角線上に鳥や花が配置されており、構図自体は安定しているが、そのため、左上の鳥の動きがおさえられ、スピード感のない絵になっている。しかし、鳥や牡丹の描写はみごとで、先の殷元良筆「枯柳水禽之図」の鳥と比較すると、彼の影響度がわかる。また久米島に現在する花鳥図とあわせて、孫億がいかに沖縄の絵画に影響を与えたかを知る貴重な作品である。山口宗季、殷元良とその後の首里王府の絵師の画風を見ると沖縄絵画と福州絵画の結びつきや首里王府の絵画に対する方針を知ることもできそうだ。

徳之島聞書

上江洲 均 ★

はじめに

1966年8月、湧上元雄先生を団長として、名嘉真宜勝氏らとともに7名で奄美諸島の民俗調査に出かけた。まだ復帰前のことと、パスポートを持っての調査旅行であった。調査地は、徳之島町全見。^{ミツミ}山と手々の中間の小部落である。約2週間滞在中の宿舎は、当時区長をしていた宮内国之助氏の家であった。建てたばかりの鉄筋コンクリートの2階を私たちは独占した。その時の調査で私は「年中行事」を担当したが、結局報告書の作成まではいたらなかった。その調査の中から、聞き取りしたことの一部を紹介したい。伝承者は宮内国之助氏、太良屋宝嶺氏、中村義武氏らであるが、昨年(1984年)12月に訪ねてみると、ご三人とも故人になっていた。その時、話を聞いた人のなかには、宮内家をはじめとして鹿児島や大阪へ出ておられる方があり、18年の歳月の長さに驚いた次第である。(文中で「現在」は、1966年(昭和41年)のことである。)

親族語索

父	アージャ (a:dʒa)	母	アーマ (a:ma)
祖父	ジー (dʒi:)	祖母	アーン (a:ŋ)
私	ワーン (?wa:ŋ)	君	イヤー (ija:)
あなた	ウイー (?wi:)	あなたたち	ウイタ (?wita)、ウイター (?witta:)
おまえ	ウキヤー (?wkja:) (多勢のときも)	きみたち	イヤッキヤー (ijakkja:)
の人	アンチュー (アンツー) (an-chu:)	妻	トゥージ(tu:dʒi)
夫	ウトウー (utu:)	子供たち	ワレンキヤ (warenkja)
女の子	ウナグヌクワ (unagunukwa:)	男の子	インガヌクワ (inganukwa:)
赤ちゃん	アーワレ (a:ware)	老人	ウッチュ、ウイムングワ (uimungwa:)
おじさん	ジー (dʒi:)	若者たち	ニセンキヤ (nisenkja:)
処女たち	メーレンキヤ (merenkja)	兄	イーリ (ji:ri)
		姉妹	ウナリ、ウナイ (wunaji)

※他人の父を呼ぶときは、その長男か長女の名にアージャをつけて呼ぶ。宮内氏の場合は、みや子が長女にいたので「みや子アージャ」と呼んだ。

集落その他

集落のことを「シマ」という。旅へ出て自分の郷里を呼ぶときは、「ワーシマ」「ワキヤシマ」という。金見の部落を県道の上下に分けて呼ぶときは、上の山手の部落を「ヤムンバーリ」、下を「スンバーリ」という。また、上を「森の前」、下を「カネクアタリ」ともいう。バーリは「原」のこと、部落内を「○○バーリ」でいくつかに区切って呼ぶことがある。浜下りや宴会や演芸会を催す時はメー・ケッサントーという所である。上部落にはワインコー、下部落にはフーゴーという井戸がある。

ある。

ゆい、すなわち共同作業のことを「ユイワーク」(juiwa:ku) という。家を葺くカヤは、6尺まわりの大きさを「1しめ」といい、刈ってもらった分だけお返しをする。これはユイワークといわむコーという。隣りの山部落では「ムエ」(模合)があるが、ここではやっていない。金銭の立替えをすることはある、それを「イロイ」という。貯金は、婦人会でまとめてやっている。班長のところで集め、山の郵便局で預ける。それは毎月行い、集金人を順番でやり、班長のところへ持っていく。

日用品の買物は、部落内の店を利用するが、高い商品は亀津で買う。自分で行けない時は、近所の人が行くついでを頼んで買って来てもらう。

村内の通知は次のようにした。区長が法螺貝を吹き鳴らして村小使を呼び、他への連絡をさせた。全戸を集める場合は、つり鐘を2回打つ。婦人会のときは7回打つ。昭和の初めごろから鐘になつたが、昭和36年からマイクを購入した。

新築の時は、村から割り当てもなされた。それを「ヤテーブー」(jate:bu:) という。朝は8時から仕事開始である。そのような家へは、部落中から金品を贈った。それを「ミーメー」(見舞い)という。仕事に来た人に対しては、朝食から出す。朝食を「ネーサル」昼食を「アセー」、10時茶を「ヒンマチャー」、3時茶を「ユックイチャー」と呼ぶが、10時と3時のことを「サンスーキ」ともいう。このほか夕食は「ユーフィ」、夜中飯を「ユナユフィ」という。

イシズイ（礎石）を置く時は、塩、酒、米を供える。米は7回洗った洗い米で、それを棟梁が頭に3回のせる。中柱を立てる場合にも塩や酒を供える。新築祝いの時は、以前神職にあったばあさんが元気なころは、その人に頼んでお祓いをさせていた。

建築用材として、ヒツバ（楨）、シイなどを高級用材として使った。それらは、田にしばらくつけておくことが多かった。棟あげの歌がある。

しきゅま石 いしてい 黄金バヤ（柱） 立ていて
ぬきさしぬ きゅらさ たていぬ きゅらさ

稻 作

種子下しは、9月ごろであった。それは酉の日をさけて行った。モチ米には、在来種のケモチゴメがあった。赤っぽく、平たく、ノギの長い品種であった。3日ばかり襄につけておき、それを取り出してすぐ播いた。植付けは、翌年の彼岸の中頃であった。

モチ米のことを「アヤゴ」という。現在は、アマミモチとアカモチが栽培されている。前者が昭和12、13年ごろ、後者は5、6年前に入った。この方は5日間水に浸してのち、取り出して茎に包み、発芽させる。現在は2期作するようになっており、1期目は2月10日ごろ種子下ろしをし、約40日ごろに植付けるから、だいたい3月下旬ごろになる。

ウルチ米のことを「ジコマイ」という。在来種にはアージコとモリタカという品種があった。旧暦の1月5日前後に水につけ、同じく旧暦2月末から3月初めごろにかけて植付けた。収穫はモチ米が早い。

ウルチ米では、新品種として農林17号、あいこく、あまみ3号などがある。あいこくは一番早く入った品種であるが、イモチ病に弱い。あまみ3号は、入って5、6年になる。これはイモチ病に

強いうえ、粒も大きく供出米に適している。収穫は旧暦6月初めごろである。

苗代は、昼の間は水を放出して干し、夜間は満水した。鴨の害を防ぐためである。現在も1期目はやっている。苗代のアブーシ（畦）の両側に2間間隔ぐらいに杭を打ち、2本づつ縄を張る。鳴り物を下げたりもする。これを「シミ」（占）という。猪に対して縄を張ったものもシミという。

苗の一握りのことを「チューニギー」という。一束のことである。30束で「チュヌキ」という。多量になると、チュヌキ、タヌキで計算する。縄をつかわない従来の植え方を「ザイライ植え」という。縄を張って植える方法を「セイゾウ植え」という。

苗とりは、たいてい男子の作業、田植えは女子が多い。むかしは、太鼓打ち・歌うたい（ウタウタウンチュ）を頼んで、田植え節を歌わせた。田植えはユイワークでやった。田を半分以上植えると、太鼓も早く打ち、田植えの人夫もそれに合わせて急いで植えた。この太鼓と歌は、大正7、8年ごろまで盛んだった。田植えは1日で終われるようにと、大勢頼んだ。午後の3時ごろからは、酒も出した。以前は、仕事を終えて家に帰り、着替えをして子どもたちも連れて夕飯を食べに来たものである。

泉田を持っている家では、田植えの前日『拝み』があった。酒と米をすりつぶしたシューギというものを泉に供える。それは現在もやっている。中村義武氏所有の田にも泉田があり、そのようなことをやっている。その田には神蛇がいるといわれている。

田植えのさい、とくに在来植えの場合、悪戯半分で誰かをツボに入れることがあった。それを「ウイークマッタン」といった。

田草取りは、素手でやる方がよい。除草機もあるが、草の多い田ではあまりよくない。回数は草の少ない田で1回、多い田で2回である。深い田のことを「フキ田」というが、「ユビ田」ともいう。このような田での作業をユイワークの人はきらう。部分的にフキ田である場合、主人があらかじめ深い所に印を立てておく。

稲作の作業について、その順序をかいつまんで述べると、次のようになる。田の荒おこしのことを「アラワーク」という。それは鋤でやったが、牛に犁をひかせることもある。犁のことをイザイという。そのあとマーガ（馬鋤）をかける。さらに植える直前にもマーガをかける。これをヴィマガという。その後へ肥料を入れ、最後の整地はT字型のシューチャ（えぶり）を使う。

肥料は、アラワークをし、「二度打ちする」と表現するマーがかけののち行う。緑肥は畑に栽培したルーピンであるが、山の木草ではツバサ（ツワブキ）や青かじをよく使った。ユーナやガジュマルはあまり使わない。堆肥（牛のクエーという）もよく使った。現在は、金肥だけを使うことが多い。また以前は、蘇鉄を刻んで入れていたが、今はやらない。

在来種のケモチゴメの植え方は次のようにやった。苗取りをする10日ほど前から田の一部分に一坪ほどの池を堀り、そこへすっかり腐らせたダイビン（下肥）を運び入れ、それに牛糞を腐らせたものを加え、かき混ぜる。田植えの前日は苗取りをし、それを一夜浸しておく。当日苗を池から出して水を切り、箱に入れて田に落とさず植えた。こうすると生育もよく、モチにねばりがつくといわれていた。この肥料のことを「ヴィーゴイ」という。あえ肥しの意である。ヴィーゴイを使わない植え方を「シラ植え」とも「ライライ植え」ともいった。ヴィーゴイの池には、その後ターヌン（水イモ）を植えた。ヴィーゴイの場所は必ずしも一定していなかったので、ヴィーゴイをつくる度

に水イモも点々と場所を移した。

稲の作り分けも行われた。それを「ツクイウェ」という。1期めの場合は、田植えと収穫は地主と耕作人が肥料と人夫を半分づつ負担する。田打ちは小作人、田草取りは両方。昼食は別。収穫のさいの分け方は半分けである。2期作は、小作人にすべてやっている。

稻作儀礼

種子下ろしの日にミキをつくり、仏壇に供える。ミキは、米を製粉をして水を混ぜ、それに煮芋を加え、砂糖を入れてつくる。

苗を浸水するとき、ワラの包みの中に一握りの種子を「親種子」といって、混ぜた。播くときは、親種子から播いてから他の種子も播く。播く日は、天気がよければ日中はさける。曇天ならいつでもよいといわれた。播種の日は、川の石を1個ツワブキの葉に包み、ススキの一番長い穂を刈りとって、いっしょに家の壁に吊っておいた。ツワブキは俵を意味し、ススキは、稔った穂を意味するという。稻種子は、日に干しては畦に積みあげ、それを何日かつづけたのち、保管した。

田植えを本格的に行う前に「ソイ植え」というのがあった。小さな田をえらんで一ます位試植することであった。

3月か4月に「甲子」の行事がある。字小使が朝各戸をめぐって酒のお初を集める。青年男女が村内の田の虫をとる。その虫をツワブキの葉に包み、5、6本組んだクバの葉柄のイカダに乗せて流す。終了後広場に集って各戸から集めた酒を飲んだ。

4月の王の日に「アンダネ」(アンザネともいう)の行事がある。稻の穂ばらみのころである。青ものを屋敷内で扱うことを忌み、仕事はすべて屋外です。食事もトーグラと庭を結んで行った。それに違反するとハブが入るといわれた。この日、隣り部落の手々では、客が来たら帰ったあとで塩をまいた。塩をまかれた人は、必ずハブを見るといわれている。だからハブを見たら塩をまかれたと思ってよいという。

アンダネの日に「サルスミマイ」という行事がある。正月以降ハブに咬まれた家の行事である。庭にテントを張り、親戚や隣近所から『見舞い』にやって来た。

旧6月の収穫はじめの頃、「シキユーマ」という行事がある。新米を炊いて神仏に供える日である。シキユーマの前日、テギヨウ(棒)の中心に鋸きずを入れ、両端に稻の束をさし、2、3度力を入れてわざと棒を折った。シキユーマの前に収穫を終えた家では、「ハナ・シウミ」といって、新米を炊いて隣近所にくばった。シキユーマの日には、稻穂を中柱に下げた。

アンザネからシキユーマまでの間は、鳴り物忌みの期間であった。それを「ワークサオイ」といった。

8月ごろ「コンユウェー」といって水神をまつる行事があった。各戸からミキとシューギを湯のみ1杯分ずつ集める。部落民が広場に集り、シューギを頭にいただき、ミキをいただく。水が切れない祈りである。

モチのつくり方には、「ツキムチ」と「ワイムチ」がある。ツキムチは、モチ米を蒸して臼で搗いたものである。ワイムチは、モチ米を水に浸しておき、それを臼で粉にしたうえで、さらに水でこねて蒸してつくった餅である。この2つの製法は行事によって使い分けがなされている。ツキムチ

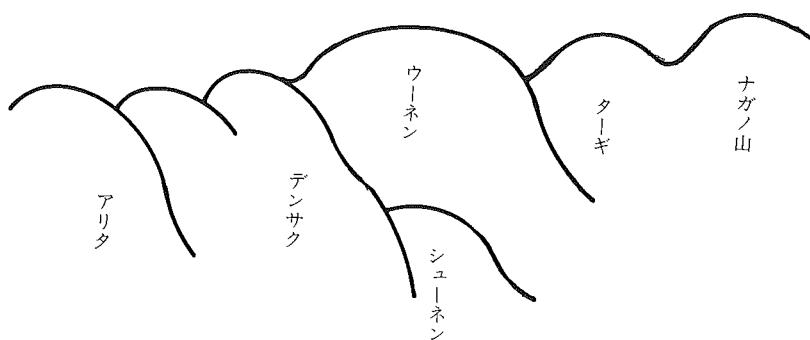
は、盆の13日、49日忌、7年忌、13年忌、33年忌などにつくる。ワイムチは、盆の15日、八月十五夜、3月3日、5月5日などにつくる。5月5日は、ムチギャーハという月桃の葉に包む。これをカサムチという。また、このほか来を盆の一杯くらい葉に包んだものを仏壇と男の子の数だけ蒸した。

地名のことなど

手々部落との境界あたりを「ワレングワ・ンケードー」という。そこは幽霊が出る所といわれている。

手々との境に小高い丘があって、そこをグスク（城）と呼んでいる。山部落にもある。

金見の部落から見える山には、北から順にナガノ山、ターギ、ウーネン、シューネン、デンサクアリタの名がついている。



金見の前の海には次のような地名がついている。

- | | | | |
|--------------|----------------------|-------------|--------------------------------------|
| ①スンイノー | 内海 | ②ナガゴロ | 長い池 |
| (3)フードマイ | 大きな泊。舟が入る所 | (4)ウラグワー | 小さな泊。舟が入る所 |
| (5)トウイジ | 鳥が止る瀬 | (6)コギムイ | こぎまわる (?) |
| (7)ナージュニー | 中の浅瀬 | (8)ホージュニー | 太い浅瀬 |
| (9)タージュニー | 高い瀬 | (10)アーミウラー | アカメ（魚）のいる所 |
| (11)ミジハイ | 水の流れる所 | (12)スリンゴイ | スリン（雑魚）がいる池 |
| (13)フーギゼメ | 潮が沖から吹き出してくる所。伊勢えびの穴 | (14)ムーイゴイ | ムーイという人が魚をたくさん獲った池 |
| (15)トンワタイ | 飛び越える所 | (16)ヒラメ | 平たい穴 |
| (17)ナガゴロ | 長い池。網をしかけ赤い魚を獲る所 | (18)マンネゴイ | 「馬の荷」いっぱいの魚をとり、伊仙へ売りに行ったことにちなむ。小さい池。 |
| (19)カイズネ | 貝のいる所 | (20)シラガマ | 白い（砂）穴 |
| (21)ミョウマルザシキ | みよう丸（船名）が沈没した所 | (22)カンジャクゴイ | 鍛冶屋の池（内容不明） |
| (23)ホーマタグルセ | 太い股の黒石 | (24)サバンヤー | サバ（鱈）のいる所。深い。 |

- (25)トゥーカ トンネル状の所 (26)カメンヤー 亀の家。亀の産卵地（浜）

(27)マウンヤー 猫の家（浜か？） (28)ニーズンブンシ 離れ岩で、ニーズンという人が、いつも釣りをした所

(29)フネハギグルセ 松材で船をつくっていた黒い石 (30)チナトイジ 綱を干す所

(31)ワーツケグルセ 豚を屠った黒石 (32)ハマゴンシリー 浜水の出ている所

(33)フーシノメンメシ 大きな岩 (34)クワーシノメンメシ 小さな岩

(35)イシワラントー 岩石が割れてたくさんころがっている所 (36)ウシモチゴイ 牛をひいていく池（水浴をさせる所か）

(37)イラバノヤー エラブウナギのいる所 (38)ウイギゴイ 泳ぐ池

(39)タナガンヤー くるまえびの家 (40)イビンヤー 伊勢えびの家

(41)カネティゴイ カネティという人が、はじめて泳いだ所。安全な場所

さらに山部落の方向にむかって、次のような名がある。

(42)ハサンゴジリ ハサミ川という川の尻 (43)タチイシ 立ち岩（石）
(川口)

(44)タチゴイ 立ち岩の下にある池 (45)ティチイシ 一つ岩（石）

(46)スジャヤリー スジャ（地名）。 (47)ナイバマ 鳴り浜。砂を踏むと鳴るから
こわれている所 (48)ダルマ岳 丸い形をした山の意か

(48)ブリイシ 群れている岩

金見の浜はこの辺までで、これから先は山部落の領域になる。

年中行事（抄）

- (1) 旧暦7月に「浜下り」という行事がある。浜に部落中が一重一瓶を持って集り、男は沖縄角力、女は千人踊りを踊った。「千人踊り」は円をつくった踊りで、男子も老人は仲間に加わった。これを「千群おどり」ともいった。円陣の中央に歌をうたう2人と太鼓を打つ1人がいる。

その前に一年以内に生れた子どもの額に潮水をつける儀式のようなものを行った。晩はその子どもの家では、「ミ一ハマンケ」(新浜迎え)という宴をはる。ハロジや近所の人が祝いにきた。この行事は、戦後廃止になった。

(2) 7月15日の晩、ムチムレ(餅もらい)があった。青年たちがムチムレ歌を歌いながら各戸めぐりをした。曲は沖縄の「唐船ドーイ」に似ている。

1 むちぐわ たぼれ たぼれ、^{ヨクヨク}祝ぬむちぐわ たぼれ (ユーイヤナー)
あたらさや あていんば ひとつたぼれ (アイヤセンスル、スライトナ)

2 ^{クイ}上ん田ぐわんば わあ田ぐわ ^{ヰナタ}下田ぐわんば わあ田ぐわ (ユーイヤナー)
来年ぬ稻がなしや 畦まくら (アイヤセンスル、スライトナ)

(3) むかし八月十五夜に山部落で角力大会があった。それを見物しに金見からも行っていたが、昭和初年から金見でも男子は角力、女子は千群踊りをやるようになった。ところが戦後も昭和30年ご

ろになって、子どもを中心とした小運動会を催すようになった。

(4) 「二十三夜拝み」は、正月、5月、9月の決った日に月拝みすることである。それを単に「おがみがなし」ということが多い。二十三夜は多いが、8日、13日、14日、15日、17日、24日、28日などである。各自の拝む日は、例えば13夜は寅、丑、15夜は戌、亥のようにエトによって決まっている。湯呑みに潮水、砂を入れ、榦やだんごを供え線香を立てて拝んだ。

(5) 豚の屠殺は、むかしは12月29日と決っていたが、戦後は25日以降となっている。区長が希望者をまとめて保健所に申請し、許可を受けている。以前は1家で1頭の例もまれではなかったが、今は3、4名で1頭の計算である。150～200斤を手ごろとしている。その後にはすぐ仔豚を入れた。肉は塩をぬって保存食にする。骨つき肉は、塩をつけ甕に保存する。10日位おいて乾燥した肉は、大阪あたりへ出ている家族に送っている。この塩豚のことを「マスツケワース」という。そして屠殺のことを「ワークッシー」という。二十日正月には、塩漬けの豚足を雑炊に入れて食べる。これを「ワンチマ・ドーシー」という。

(6) トウシヌユル（大晦日）には、天井の鼠にも供え物を供え、つぎのような唱えごとをする。

「ヤンヌシガナシ キューヤ トウシヌバン ヤレーン ツキティ、ウバン ンキヤーガイソチ、ツクユルムン ツクラチ、スサワイ アラハンゴイ、カフナクトウ アラチタボリ」

(7) この日の夕方、庭に実のあまりつかないミカンなどの果樹があれば、「成り木責め」をした。米の研ぎ汁をかけ、斧を持った人が木に向って、来年はなれるか、成れないなら伐るぞという。「ヤニヤ ナラユミ ナララニ、ナララーマ キーユシガ」とすると反対側の人が「ナラユンド ナラユンド」(なれる なれる)と答える。

(8) 大晦日の夜、寝る前に牛に草を入れる時、「アキホ サダミティ ニンブチ」(開方を定めて寝なさい)という。しかし、翌日よくない方向を向いて寝ているときは、後日杖い(キスンという)をする。若水は、牛の向っている方向の井戸から汲む。

補遺

(1) ケンモンの話

ケンモンは、魚の片目だけを食べると信じられている。1つの松明から、10くらい出るといわれ、人もだたす。猫のような顔で、足は地についていない。青光りもするが、松明のような光をしている。人をだまして、畑の中を引きまわすこともある。よく出る所は西の岬で、ハサンゴズリ(ハサミ川尻)附近から出る。その住いは、ウスコ木である。そのウスコの木に5寸釘を打ちこんだら出ていくと信じられている。

(2) 幽霊の声をよく聞く人

Mさんは、幽霊の声をよく聞くことができる。死者が出る前には、部落内のその方向や人の声まで聞きわかる。この人のことを「ムンキキ」のおじさんという。

(3) トイマデ

山の小鳥が家屋内に入ることを不吉とした。シャンミヤ(めじろ)、シューヒ(ひよどり)、コッカール(アカショウビン)などもこの部類に入る。このような時は、その家ではご馳走をつくり、家の屋根の見えない所で宴をもよおした。鳥は捕えて酒を飲ませ「家の災難を持って行け」といつ

て放す。浜では、探しものをする真似をし、「あった、あった」といって何かを見つけたように言って帰って来る。帰ってからは、仏壇と火の神にお茶を供える。こうして厄払いすることを「キスン」という。

(4) 夜遊び

むかしは、若者たちが三味線などを弾くと、そこへ女たちがやって来た。遊んでのち解散すると、女たちは宿に行く。そこを青年たちがさがして泊りに行った。

(5) 糸満人

山部落には、糸満系の人たちがおり、漁師が多い。戦前は沖縄から子どもたちを買って来た。このあたりからは売ったことはない。5月5日には、彼らは何組かに分れて「ハーレー」競漕をした。

糸満の魚売女は、魚を掛けで売り歩くときは、ソテツの葉をちぎるだけであるが、後日集金に来る時は、間ちがいなく集めていた。

(6) 新正月

新正月は、昭和35、36年から新暦でやるようになった。町からの達しによるもので、当初は反対もしていたが、現在では全部新正月になった。旧正はちょっとした馳走をつくるだけである。旧正は、砂糖きびの収穫などでむしろ忙しい。

(7) 産育

バーサ（芭蕉）の糸で臍つぎをする。満潮のときは安産。しかもその子は成功すると信じられている。

(8) トンバラ岩

金見崎の沖に「トンバラ岩」がある。むかし、その岩のところでノロの船が遭難し、岩によじ上ってただひとりだけ助かった。しかし、女ひとりだけというので、側を通る船は救ってくれず、ノロはそこでついに世を去った。戦後もひとりの女を乗せた船が、水船になって金見の浜辺に来たことがあった。むかしから、ひとりの女を船に乗せてはいけないとわれている。

(9) ギュウナグサミ

大阪や鹿児島から里帰りした人をハロジの人たちが、浜へつれて行き、1日漁をして遊ぶ。浜には日蔭小屋を建て、鍋をおいて獲物を料理して皆で食べ、楽しむことを「ギュウナグサミ」という。歓迎会、慰労会である。

(10) オキテオオハチメ

むかし手々部落に捷大八目という武将がいた。この人は首里に仕え、首里城の築城にも参加した。ある日、彼を妬む者が、下で石を削っている彼をめがけて石を落とした。それを大八目は、斧でその石を払いのけ、涼しい顔をしていたそうだ。

(11) 海ことば

海では、陸のものを呼ぶとき、別の呼び方をする。

(例) (1)ホーチャー(庖丁).....シリ	(2)ウーベラ(小籠).....ベントウ
(3)ハンズン(芋).....ダグ	(4)クバガサ.....ナーバ
(5)水.....アマモン	

(12) 木を伐る日

山の木は、甲・乙・壬・癸、の日は伐らない。丙・丁・庚・辛の日に伐る。また「ズクワの日」といってよくない日がある。これは土中から火が吹き出ると信じられている。この日は農作物の植付けはしない。稻種子を浸す日は、酉の日と天火、土火をさける。

(13) トシワシリ（年忘れ）

ハロジの多いところでは、12月15日頃から始めた。今流にいえば「忘年会」のことである。現在は、12月25日に公民館に部落中が集ってやるようになった。翌年61、73、85歳を迎える人たちを招待して行っている。

(14) トウシヌユウエ（年の祝い）

昔は、正月3日以降の初エトの日に61、73、85歳の祝いをしたが、現在は3日に決め部落での合同祝賀にしている。合同にしたのは昭和30年ごろである。祝いに当った家では酒を出し、部落民は1人につき20円を出す。その日の料理は、参加者の弁当から一片ずつ集め、主賓である当り年の人にあげる。あとでその家では、部落民に記念品をくばっている。

昔は、膳に昆布・塩・魚を盛り、神酒もおいて、客と拝みに来る人との間で献酬があった。客は「シラギ、ムレガ、キエタン」（白髪をもらいに来ました。=あやかりの意）といった。

石碑概観——県内の石碑採拓を通して——(一)

上江洲敏夫

(うえす としお
県立博物館学芸員)

沖縄県教育委員会（事業主体は教育庁文化課）では、昭和五十八・九年の兩年度にわたり、国庫補助事業の一環として、県内に現存する金石文の遺品調査を実施している。私も調査員の一人として採拓班に加わり、崎間麗進・又吉真三・阿波根直孝・与那嶺美和子の各氏と一緒に本島と久米島に所在する金石文の拓本を採つて回った。また、博物館の資料収集や個人的に採拓する機会もあって、石碑や梵鐘の金石文に親しく接してきた。そこで、それらの調査を通して得た知見を、特に石碑に焦点を絞つてそのいくつかを慨観してみたい。

金石文とは、石材や金属にある目的をもつて刻んだ文字、すなわち、石碑や梵鐘などの銘文のことである。石碑や梵鐘などに刻まれた銘文を大別すると、①社会的なできごとや記念すべき事業を完成したとき、②歴史上のある特定人物の功業を顕彰するため、③故人を偲んで氏名・没年月日・事跡などを子孫などにしらせるため、④ある事象や建築物の縁由・来歴等を後世に伝えるため、⑤ある事物を賞賛した記念銘とするため、⑥仏教の加護や除災招福など宗教的・呪術的な目的のためにつくられる場合が多い。以上六つの暫定的な区分は重複することもあり、一概に断定しえるものではないが、大略右に示した目的で金属や石に刻字し

て後世へのメッセージとしたことは明らかである。

①は植樹記念とか道路建設、あるいは橋梁の架橋などが比較的多く、あげられる。②には大琉球国王頌徳碑・百浦添欄干之銘・国王頌徳碑などが代表的なものである。③には墓碑・墓誌・厨子甕の銘書きなどがあり、識名沢祇王舅墓之銘・一翁寧公墓碑・今帰仁池城墓碑などがあげられる。④の種類はもつともバリエーションに富んでおり、安國山樹華木之記・たまおどんのひのものん（玉陵碑）・山北今帰仁監守來歴碑記・当蔵村阿丹祢川嶽碑文などの縁由・来歴を刻銘したものや、琉球国新建至聖廟記（孔子廟碑文）・琉球国新建儒學碑記・琉球国新建國學碑文などの建築物を建設した際にそのいきさつを刻銘したものなどがあげられる。⑤の代表的なものは中山第一・飛泉〔泉漱〕・靈脈流芬など、龍龜を贊美した冊封使の石碑などがあげられる。⑥の宗教的なものとしては銅鐘や梵鐘等があげられ、呪術的なものとしては石敢當や梵字碑・經塚碑などがある。梵鐘等には旧首里城正殿鐘、円覺寺殿前鐘・殿中鐘・樓鐘など県内に十二基が現存する。丁字路や三叉路などに造立された石敢當は各地でみられ、梵字碑は中部を中心に那覇市や多良間村・粟国村などにも存在する。經塚碑としては金剛嶺・觀音經塚碑（平良市）などがある。
——首里の石碑・詩碑——」の資料をもとにまとめたものである。金石文遺品調査の成果は、近々報告書が刊行されることになつてるので、沖縄金石文の全体像を掌握する意味でも参考にされたい。

たまおとんのひのもん（玉陵碑・片面）

所在地 那覇市首里金城町

建立年 弘治十四年（一五〇二）

法量 縦八八・〇cm 横三〇・五cm

石質 閃綠岩（輝綠岩）

備考 県指定文化財

【銘文】

首里おきやかもひかなしまあかとたるしよりの御ミ事

御一人よそひおとんの大あんしおきやか

御一人きこゑ大きミのあんしおとちとのもいかね

御一人さすかさのあんしまなへたる

御一人中くすくのあんしまにきよたる

御一人ミやきせんのあんしまもたいかね

御一人こゑくのあんしまさふろかね

御一人きんのあんしまさふろかね

御一人とよミニすくのあんしおもひふたかね

い上九人

碑文の内容は、尚真王の御詔として世継御殿（尚円妃）・聞得大君（尚円長女）・佐司笠（尚真長女）・中城王子（尚清）・今帰仁王子（尚真第三子尚韶威）・越來王子（尚真第四子尚龍徳）・金武王子（尚真第六子尚享仁）・豊見城王子（尚真第七子尚源道）九人の名をあげ、これらの人たちの子孫は千年万年にいたるまで、この玉陵に葬りなさい。もし後世このことで争う人があつたら、この碑文を見なさい。この碑文に背く人があつたら、天に仰ぎ地に伏してたたるべし、となつていて。

この御すゑハ千年万年にいたる
までこのところにおさまるへし
もしのちにあらそふ人あらはこのすみ
見るへしこのかきつけそむく人あらは
てんにあをきちにふしてたるへし

大明弘治十四年九月大吉日

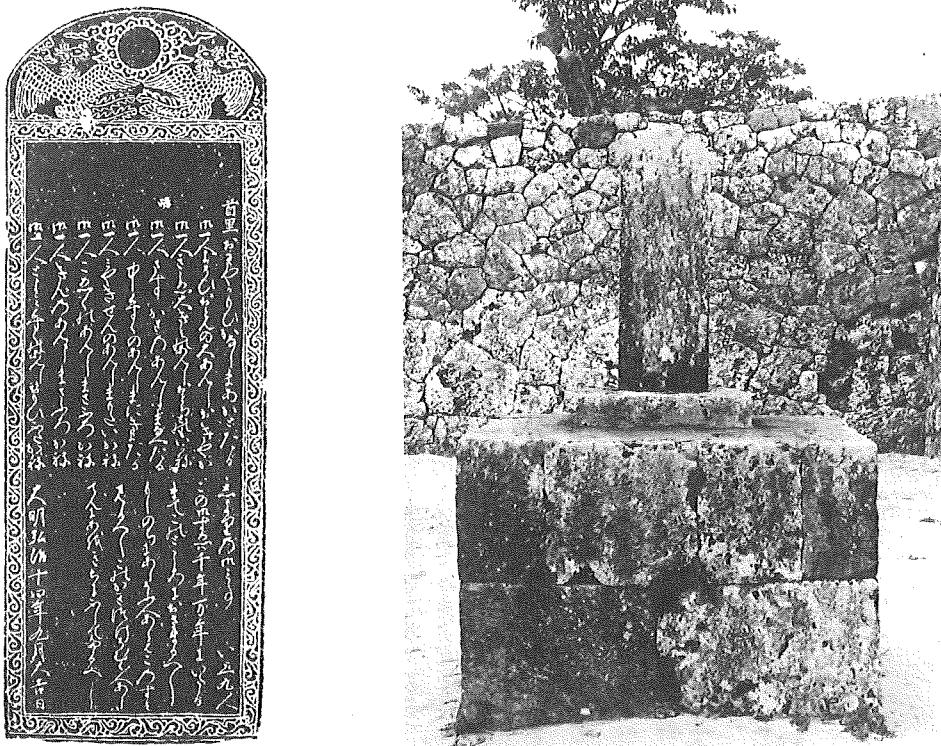
【解説】 王家の陵墓である玉陵の外庭に建立されている石碑である。玉陵は弘治十四年（一五〇二）、尚真王が父尚円の遺骨を見上森（みあげもり）の陵墓から移葬するために造営したものである。碑は琉球石灰岩を積んでつくった台座の上に碑身を建て、外庭の左側に建立されている。

石材が中国産と思われる硬石質の閃綠岩（輝綠岩）を使用しているためほとんど摩滅しておらず、ほぼ完全な状態で残つております。拓本も鮮明に採れる。碑身の周囲には界線内に唐草文が施されている。碑の中には碑名ではなく、「琉球国碑文記」の中に「たまおとんのひのもん」とある。

碑文は仮名文（琉文）で記されており、琉文刻銘の現存金石文では最古のものとされる。碑は「首里おきやかもひかなしまあかとたるしよりの御ミ事」とあって、これが尚真王の詔であることを記したあと、上下二段に分けて刻銘されている。この碑文は王位継承をめぐる王家の内紛を示す資料にあげられている。すなわち、尚真王の生母（尚円妃）が尚宣減を排し、尚宣威の娘を尚真の正妃に迎えて長男尚威衡を生むが、第二夫人の華後の讒言にあつて廢嫡となり、華後の子尚清（尚真の第五子）を即位させている。この内紛の結果、玉陵に葬る人を制限するために建立された碑であるといわれている。

碑文の内容は、尚真王の御詔として世継御殿（尚円妃）・聞得大君（尚円長女）・佐司笠（尚真長女）・中城王子（尚清）・今帰仁王子（尚真第三子尚韶威）・越來王子（尚真第四子尚龍徳）・金武王子（尚真第六子尚享仁）・豊見城王子（尚真第七子尚源道）九人の名をあげ、これらの人たちの子孫は千年万年にいたるまで、この玉陵に葬りなさい。もし後世このことで争う人があつたら、この碑文を見なさい。この碑文に背く人があつたら、天に仰ぎ地に伏してたたるべし、となつていて。

壺川松尾碑文（片面）



【銘文】

元祖者

先王尚清主君第八男子諱谷山王子法名山英其懷母湧田村之處子也因慕鄉里鑿墓于此坊望潮水激灑廻隈澳青山四接翠無休伏思往昔有宜地脉者看之者乎其故者綿々子孫寔驗于今日者矣雖然山英其子南槐以為王之子孫葬于玉陵殿山英之孫寒林道葬此墓寒林道子雲峯慕鄉里近處故墓鑿于真喜與山從雲峯被葬于真喜與墓由是湧田之墓則無行葬況歷代歲久荒蕪頗及破壞時是康熙十六年丁巳六月卜吉再葺修此墓此是緣由為使後裔知之乞索于予以垂後之記予難辭謹為碑文云爾

康熙十八年己未二月吉日 大中大夫兼長史司蔡鐸撰此

前諱谷山王子朝宗 摩文仁按司朝信 湖波藏按司朝榮 諱谷山按司朝以 前摩文仁親方滿恒 摩文仁親方滿辰 儀真親雲上滿京

【解説】諱谷山王子（尚洪德）が生母大按司志良礼真世仁金（号は礼室）の郷里湧田に墓を造営したことや、四代目の孫が壺川松尾に墓を造営したこと、荒れた湧田の墓を修補したことなどの縁由を記した碑文である。大按司志良礼は、王農大親の娘で、尚清王の夫人となり諱谷山王子を生んだ。「壺川松尾碑文」の名称は石碑には刻銘がなく、『琉球国碑』

所在地 那覇市首里山川町

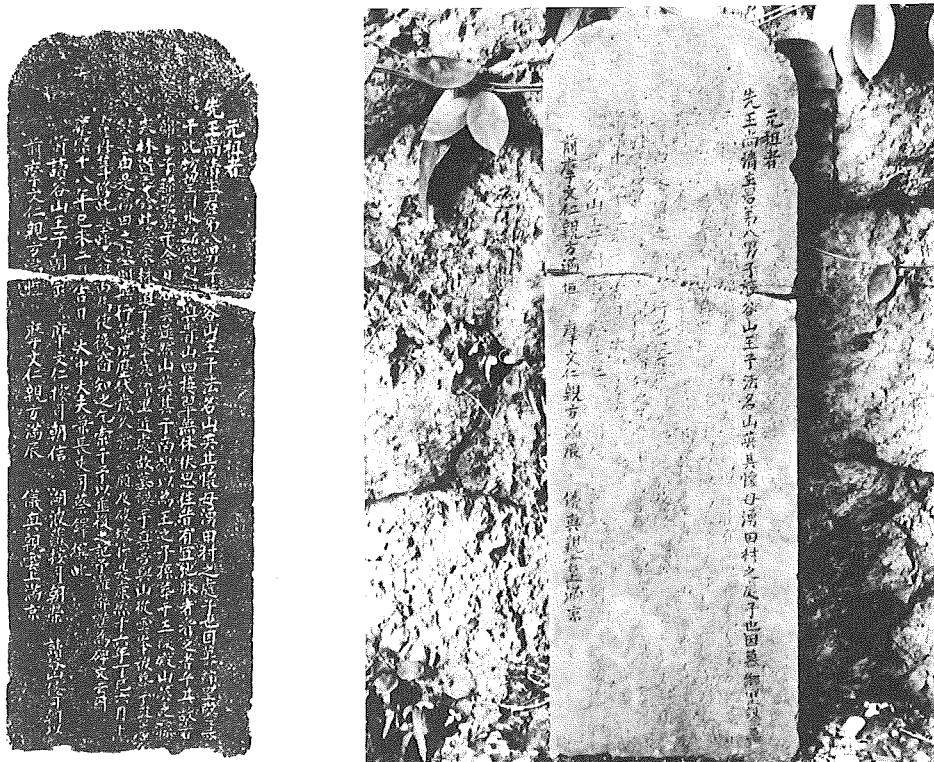
建立年 康熙十八年（一六七九）

法量 縦七七・〇cm 橫二八・〇cm
石質 微粒砂岩（ニービヌフニ）

文記によつたものであるが、碑文にある「真喜与」は松尾（マーチュ）を方言表記したものである。壺川上獅子松尾に按司墓と称する墓があつたといわれるが、湧田・壺川の両墓とも大正初期に上之屋に移され、さらに首里山川に移されて現在に至つてゐる。碑は上約三分の一のところで折れ、台座もなかつたが、昭和五十九年に接合修理した上で琉球石灰岩の台座に建てられてゐる。碑文は『中山世譜』（蔡鐸本）の編者であり、蔡温（具志頭親方文若）の父である蔡鐸（志多伯親方声亭）で、彼が三十五歳のときのものである。

碑文の内容は、元祖は尚清王の八男読谷山王子、法名は山英、その生母は湧田村の処子である。郷里を慕い湧田に墓を造営する。良き地を得て子孫も繁榮したが、山英と子供の南槐は王の子孫であるため玉陵に葬むる。山英の孫寒林道は湧田の墓に葬る。寒林道の子雪峯も郷里を慕つて湧田の墓近くの真喜与山に墓を造営、雲峯以後は真喜与山に葬れる。以来、湧田の墓への葬送がなく、墓地は荒れ果てて破壊に及んだので、康熙十六年（一六七七）に修理を施す。これらの縁由を後々に知らせるため、蔡鐸が撰したとあつて、前の読谷山王子朝宗以下六人の関係者が列記されている。

碑は石質が微粒砂岩であるため、風雨によつて摩滅が進行して不鮮明な部分があるので、採拓の際には打ち込みをできるだけ十分に行なう必要がある。



本覚山碑文（両面）

所在地 那霸市首里山川町

建立年 天啓四年（一六二四）

法量 縦八三・〇cm 横二七・〇cm

石質 微粒砂岩（ニーピヌフニ）

【表銘文】

首里の王天きやすゑあんしおそいかなしのおなこのおやかなしの御す
りめしよわちや事ミいくに御はか」けらへらちへ御ミつかいすれて、
ミ御ミ事をかミ申候ほとに石のさいくあつめ候て一七日の内にからめ
きみちへて「天啓四年甲子十月六日ひのとのゐのへに御おくりし申候
あにあれは国中の僧俗めともわらへの御吊ハ」いふにおよび申さすをり
ふし唐より御つかいのちいへい御わたり候て御さ候間御とむらひにい
ろいろの」かざり物をするかくにて代の官人さいもんよミ候てミはい
からめき申候かにある事ハ昔今にもあるま」しく候ほとに末代の
しるへのためにひのもん御たてめされ候此御はかところは大あんしお
しられのおもひ「くわへゑくか御三人おなこ御五人に御給り候ほとに
あんしも」けすも入事あらは天にあふき地にふしてたるへし 世あ
すたへ三人くしかミまによこ」国かミまさふろいまきしん思ひとく總
奉行なか城おもひ二ら石ふきやうあたにや太郎」

于時大明天啓四年龍集甲子冬十月如意珠日

敬白

【裏銘文】

其惟一鏡妙円皇后者尚豐天子之尊母也然尊母一朝羅病終入滅矣為」葬此

尊母命石良工新為開此山以二夜三日大成了越茶毗節 大明國之」欽差有
合故大明之高客奏涅（澄）样樂一國之諸僧唱梵相曲巍々堂々哉喪礼此
趣可謂前代未聞也誰敢不瞻仰哉為令後人知記此碑文久立珍重三司官」具
志守真如虎國上真三郎今帰仁思德總奉行中城思次郎石奉行阿谷」屋太郎
大明天啓四年甲子十月如意珠白天德山田覺藍玉叟記之

【解説】

尚豊王の生母である金武大阿母志良礼の死去に伴つて造営された金武按司家の墓地（この墓は持領墓であるといわれている）内に建立された墓碑である。同墓地は、西の玉おどんあるいは山川の玉おどんと隣接しており、山号を本覚山と称するところからこの碑名がついた。墓碑は、琉球石灰岩でつらえた台座の上に碑身を建て、墓に向つて左よりに建立されている。同碑は今次大戦で戦禍を蒙つたが、碑頭部分が破損しただけでほぼ完全に残つており、戦後、門中の人達によつて再建された。碑身は表裏とも碑面に「本覚山碑文」と横書きされ、碑頭には日輪（太陽）と瑞雲の文様があり、裏面は碑文の四周に唐草が施されている。表碑面の碑頭右側の一部が欠損しているが、裏碑面は接合されてほぼ完全である。碑文は、表碑面に仮名文（琉文）、裏碑面は漢文で彫り込まれている。仮名文は琉文金石としては最後のものと思われ、文章の構成は「たまおとんのひのもん」（玉陵碑）にならつてゐる。裏碑面の漢文は円覚寺の住持藍玉宗田和尚が漢訳したものであるが、これは表碑文と同時期に彫られたものではなく、「尚姓家譜」（金武家）に「雍正十二年甲寅九月二十五日訟相達記之」と見えてゐるので、建立したあと百年以上経過した一七三四年の刻銘であるといわれてゐる。しかし、この藍玉宗田（藍玉長 書家の城間盛久、すなわち尊円城間の実弟である）は一六二〇年代の人であるので、漢文刻銘が雍正十二年（一七三四）とし

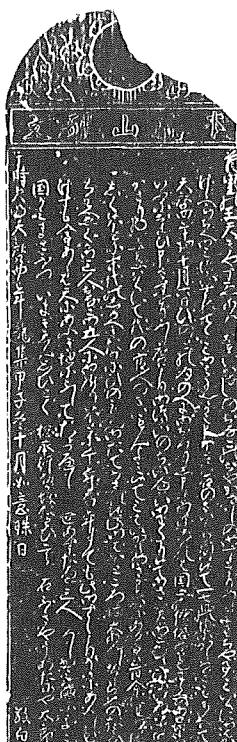
た場合、時間的なずれが生じてくるので、實際の撰文年は表碑文と同時期とみた方が穩当かとも思られる。

碑文の内容は、尚豊王の生母の死去にともない、王命によつて新しく墓を急造して葬礼を営んだが、國中の僧俗や女子供の弔いはいうにおよばず、滞留中の中國の使者も名代の官人を遣わして飾り物をおくつたり、祭文をよませるということは前代未聞のことであるので、末代に伝えるためにこの碑を建てるに墓碑建立の由來を記したあと、この墓は大阿母志良礼の男子三人・女子五人の子供達に与えたものであるので、いつの世にあつてもこの筋のほかに、按司や士庶が口出しするようなことがあれば、「天に仰ぎ、地に伏してたたるべし」とあり、最後に三司官（具志頭親方安之・國頭親方朝致・今帰仁親方宗能）、總奉行（中城思次郎）、石奉行（阿谷屋太郎）の名が童名で記されている。

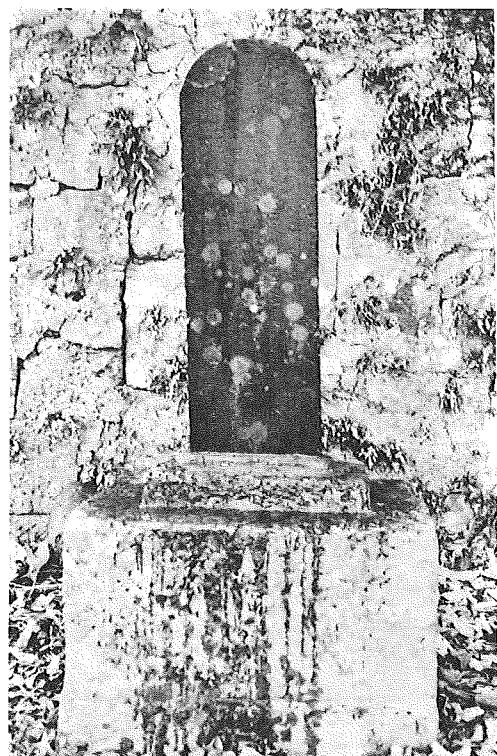
なお、かな文が表碑面、漢文が裏碑面であつたと考えられるが、現在の碑は漢文が墓庭側に向き、かな文は墓室側に向いて建立されている。また、銘文のかな文はきわめて鮮明に採拓できるが、漢文の碑面はかなり摩滅して不鮮明なところが多く、採拓の際は慎重に叩く必要がある。漢文面が摩滅した原因として考えられることは、戦前建立されていた碑の場所や方向と風雨との関係がある。



(裏)



(表)



當藏村阿丹祢川嶽碑文（両面）

一 同八拾疋
前伊江親方

所在地 那霸市首里當藏一の二八の四

建立年 嘉慶十九年（一八一四）

法量 縦九八・〇cm 横五〇・〇cm

石質 微粒砂岩（ニービヌフニ）

備考 御嶽は那霸市指定文化財

一 同七拾五疋完
宜寿次親方 仲村親方 奥平親方 知花親方 阿波根親方
補霸親雲上 與那霸親雲上 手登根親雲上

大工廻親雲上 嘉名里主 垣花里主 富村里主 和宇慶親雲上

一 同五拾六疋完

安良城親雲上 安慶田親雲上 伊良波親雲上 翁長親雲上 喜

如嘉親雲上

一 同三拾疋完

安良城朝喬 真壁朝祥 真壁朝佐^(顕) 佐久本朝願 浦崎政興

浦崎政行 阿波根朝章 久志安曉 渡久

原兼列 栗国良昌 又吉保憲

久志安之 嵩原安英 佐久真盛珠 仲村朝富 久志安曉 渡久

嵩原安輝 高吉建永 阿波根朝英 高良憲輝 前川安郁 嵩原

安應 嵩原安郁 安良城朝得

伊渡村正宣 德田安承 栗国良全

以上

安良城親雲上 真壁里之子親雲上
嵩原里之子親雲上 仲村渠親雲上

【裏銘文】

阿丹川の御嶽は當藏むら祈願所の事候へとも往年鹿抹の仕形これあり
不穏ところより取繕致尊敬以来神明加祐の寄特致顯然頂上の事候然處
頃年若輩のものとも御嶽境内致徘徊遊戯の事ともこれあるらん相聞え
如何の事にて岡石垣致修甫透間の所植木等の儀今般手沙汰を以相計度
候」いつも申談平等の側方へも致懸合御許容の上むら中の所持又は
その「ほかの面々願意次第勧進を以彼是結構に為取成事候左候得は先
様不敬の」拳動これなくやう平常のみまはり居むらの百姓へ内分にて
相談青銅弐千疋」致附属右利足を以往々御嶽守護一件の致茶代料様申
渡聊無緩疎締の為

嘉慶十九年戊八月吉旦碑文如件

致効進候人數

一 青銅九拾五疋完

美里王子 名護按司 真壁按司 伊江按司 摩文仁按司 豊

見城按司 勝連按司 小祿親方

伊江親方 識名親方 久志親雲上 嵩原里主

【解説】一八一四年、当藏村にある安谷川御嶽を有志が勧進して修理し

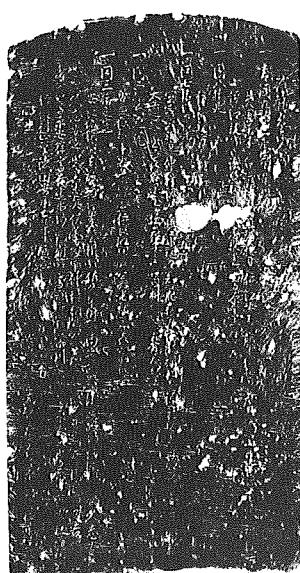
たときに建立した碑文である。安谷川御嶽は当藏と大中の境界、王府時代の宿道にもなった安谷川坂に隣接して位置する。当藏村の祈願所であるとともに、首里王府時代は首里大阿母志良礼（首里殿内）が所管する

首里城外六御嶽の一つに数えられる有数の御嶽であつた。この御嶽は拝殿形式をとつており、宝珠をのせたアーチ門の石垣で境内を内外に分け、門右側に碑が建立されている。石碑には碑名がなく『琉球国碑文記』に「當藏村字阿丹祢川嶽碑文」とある。碑身は一枚岩（琉球石灰岩）の台座にさし込むように建てられている。

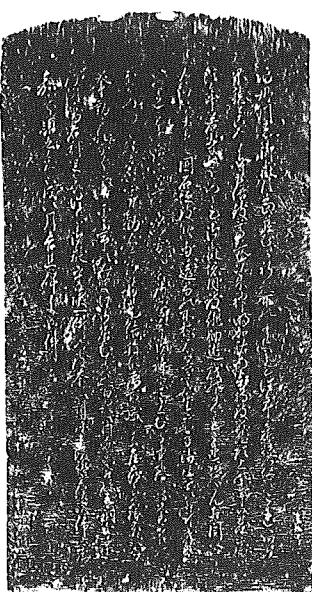
碑文の内容は、安谷川御嶽は当藏村の祈願所である。以前、粗末に扱われていたのを修理して尊崇したところ神の加護があつた。ところが近年になって、若者が御嶽境内で良からぬことをしていると聞いている。

そこで石垣廻いの修理や空地への植樹のことを相談し、王府への許可も得た上で、村中の人たちがそれぞれの願意に応じて勧進することになった。そして以前のような不敬がないよう百姓たちに見回りを依頼し、青銅二千疋（二十貫文）を与えて、その利息でお茶代にあてるように申し渡す。十分に管理がいきとどくよう、嘉慶十九年（一八一四）、ここに碑文を撰すとある。

碑文は表碑面に仮名交り文で御嶽の修理と管理について、裏碑面には勧進者名が列記してある。地域有志が勧進して御嶽を修理したり、管理することを取り決めた事例としては唯一の碑文である。石碑は台座の上に建立されている。保存状態は比較的良い方であるが、若干摩滅してきており、特に裏碑面の方が進行していることがわかる。裏面は台座に近いところまで銘文があるので、採掘の際には慎重に小形タンボで叩くことが肝要である。なお、同碑文は『琉球国碑文記』の中にも収録されているが、勧進者名に碑銘と異なる部分が確認される。



裏



表



沖縄聖劇 玉城朝薫二百年祭記念碑

所在地 那覇市首里当藏 首里城跡内

建立年 昭和八年（一九三三）

法量 縦一四八・〇cm 横一五〇・〇cm

石質 微粒砂岩（ニービヌフニ）

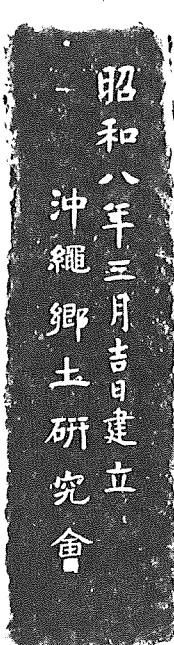
【解説】玉城朝薫（一六八四—一七三四）の二百年祭に建立された記念碑である。玉城朝薫は組踊の創始者あるいは古典女踊の創始者としてあまりにも有名である。朝薫が作ったといわれる「二童敵討」・「名莉子」・「女物狂」・「孝行の巻」は一般に五番と称し、今日でも重要な演目となっている。昭和五十九年は朝薫が生れて三百年ということで、玉城朝薫誕三百周年を記念するいろいろな行事がとりおこなわれている。

この記念碑は、表碑面に隸書で「沖縄聖劇 玉城朝薫二百年記念碑」、裏碑面に「昭和八年三月吉日建立 沖縄郷土研究会」と刻名されている

ようすに、沖縄郷土研究会（会長真境名安興）が中心になって、玉城朝薫の没後二百年を記念して建立したものである。碑は朝薫作の組踊が最初に演じられた首里城内の北殿側に建立され、昭和八年三月十二日に主催者の沖縄郷土研究会外関係者により除幕式ならびに慰靈祭が挙行された。

碑身は微粒砂岩（ニービヌフニ）の自然石を使用し、台座も同質の自然石を利用している。碑銘は書家の謝花雲石の書になる。

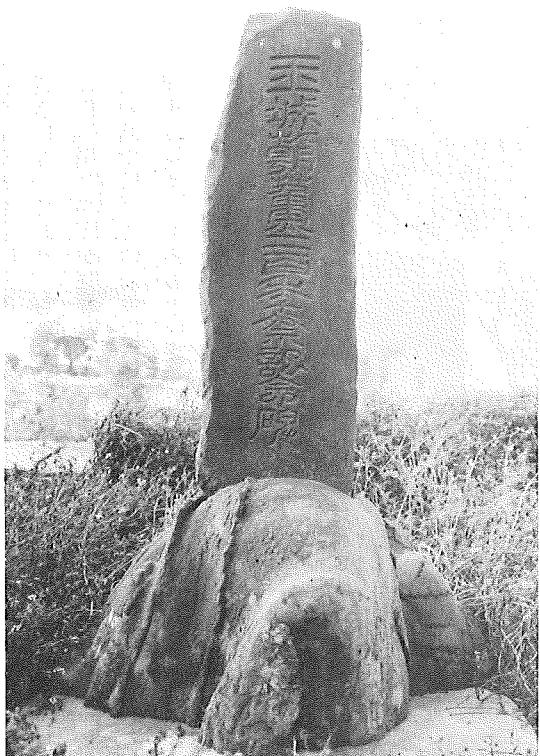
この碑はかなり大形に属し、長さは全紙を紙継ぎしなければならないので、あらかじめ法量を測定して採拓に臨む必要がある。また、場所が高台となつていて風が吹き上げてくるので、風のない日に二人以上の人數は必要となる。タンボも大形のものを準備すると便利である。



(裏)



(表)



飯森墓碑（両面）

所在地 大里村字南風原

建立年 嘉慶二十二年（一八一七）

法量 縦三五・八cm 横一四・四cm

石質 微粒砂岩（ニーピヌフニ）

【表銘文】

爰に骨あり世遠くして

その人しるへからつ然れども

靈魂の祟りありて

嘉慶廿二年丁丑八月十日其

散骸を安置しけり

【裏銘文】

不思議や其次夜神翁

來ていひもりと唱よと

告命あり仍而由来を

碑文に記之

【解説】一八一七年、飯森の命名由来を刻銘した墓碑である。碑文によつて明らかなように、いつの世の誰かも知れない遺骨（「沖縄県史編纂資料」には、「食榮森」となつていて、住民は遠い昔この部落を創立した人々を祭つたところだということで、敷内からは一切草木も刈り取らなかつたという）があり、その靈魂の祟りがあるところから一八一七年



になつて丁重に供養したところ、その次の夜に神が現われ、その場所を「いひもり」と呼ぶようにといふ告命があつたので、その由来を碑文に刻銘したとある。同碑のある場所は飯森御嶽と称し、拝所として祈願の対象となつてゐる。自治会事務所のある扁額にも「食榮森」と書いてあるところから、あるいは「食榮森」が本来の名称であつた可能性もある。古い散骸を安置した墓は、森の頂上にあり、宝珠をいただくドム状の特殊構造となつてゐる。墓碑は台座がついて墓上左側に建立されているが、ほぼ真中から二つに割れて未接合の状態である。同御嶽は五月ごろになると各地から参拝客が訪れるという。御嶽形成の経緯を知る貴重な碑文である。なお、石碑の左後方には今帰仁城への搖拜所がある。また、同森右側の岩上とその下方に「大瀬山」と刻銘した石碑が二基ある。上方の碑は横書きされて右側に「古郷」と刻銘されている。下の碑は縦書きになつており、右上端には「大清 □□ 吉日」と刻銘され、近くには「同」の字が刻まれた欠落部分の破片がころがつてゐた。地域の老婆の話では、この二つの石碑は上方が男子、下方が女子誕生に際して祈願する場所でもあるという。

大門森の下の墓碑（片面）

所在地 真志川市赤道

建立年 康熙四十三年（一七〇四）

法量縦五六・一cm横二七・一cm

一
銘文

四代為二ま

同 喜屋武撻親雲上

五代為こまこ
観雲上

同島袋筑登之
新雲上

四代口
加那高江洲

同高江洲尔也

同上

同
三山城

大清康熙四十三年
申十二月十八日

はか代々くわまか為知仕置

宮里村なきと引の御ろさしの



(裏)



(表)

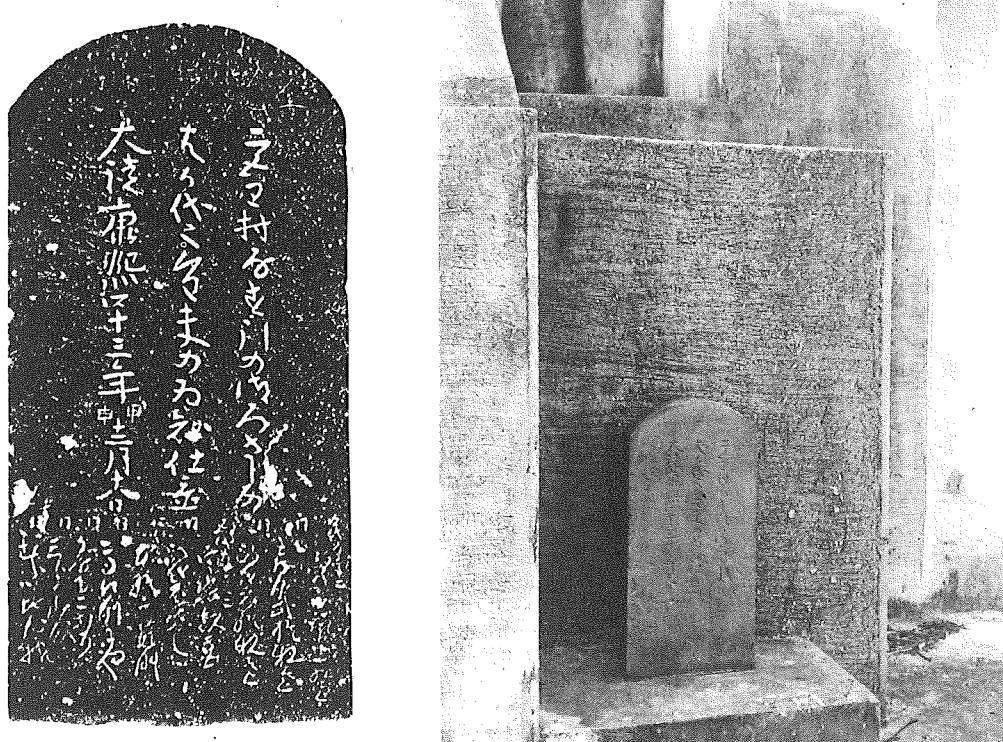
〔解説〕一七〇三年、「大門森の上の墓碑」の下方に宮里引の子孫が建立した墓碑である。宮里姓は、薰氏六姓山城大屋子（一六〇二）一六六四・九・十三）の次男で、七世宮里撻親雲上（一六二四）一六九三・六一・一二）を系祖とする。妻の真牛は儀保あむしられ（一六二七）一六九三・六一・一二）で、戦前まで大きな龍の文様を配したかんざしがあつたが、かぶは戦争で消失してしまい、現在柄だけが神屋に保管されている。

という。

この墓碑は「大門森の上の墓碑」と同時に建立されたもので、碑面下方には子孫の名前が刻銘してある。その部分は摩滅が著しく、不鮮明な部分が多いが、およそ右記の銘文のようになる。比屋根撻親雲上といふのは、八姓長男比屋根撻親雲上（一六四三～一七〇八・一一・四）、喜屋武撻親雲上は次男の喜屋武撻親雲上（一六四六～一七二一・一・九）のことであろう。次の宮里撻親雲上と島袋筑登之については不明だが、加那高江洲（一六七八年生四男）、高江洲尔也（一六八〇～一七〇一・五・一三・五男）、三良山城（一六七六年生三男）、武太比屋根（一六七四年生 次男）は八世比屋根撻親雲上の子供達であると思われるが、「かな下こおり」は不明である。

にむけての土地造成の際に上方へ移建されている。

なお、同墓地は戦後の混乱期に他人名義となつてしまい、それを住宅公団から池原門中が買い取つて、新しく墓を建造したものであるといふ。新しい墓は、古い墓と同方向に向けて建造したといわれ、墓碑は向つて左側に建て、台座はなく周囲を直接セメントで固めてある。



大門森の上の墓碑（両面）

全文判読が可能である。但し、裏面は銘文近くまでセメント製の台座がせまつてるので、採拓の際には小形タンポで慎重に叩く必要がある。

所在地 具志川市赤道

建立年 康熙四十三年（一七〇四）

法量 縦六一・〇cm 横二五・〇cm

石質 微粒砂岩（ニービヌフニ）

【表銘文】

御ろさしの子あさなはんの比屋根撻親雲上

又ひやたき此二人のはか永々子まこ為知

大清康熙四十三年甲申十二月十八日

【裏銘文】

此いしたてたる人わ御ろさしのはかにしろし

置

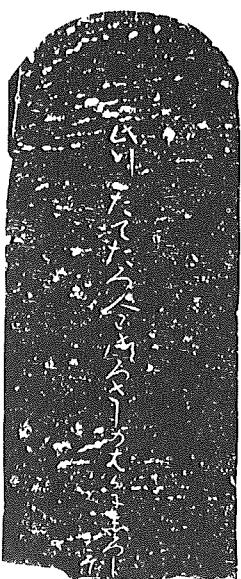
【解説】康熙四十三年（一七〇四）、具志川市字赤道大門原に大門森と

呼ばれる小高い丘があり、その中腹に横穴を掘り込んだファインチャード墓がある。その墓庭右側に建立されているのが当該墓碑である。碑文に出

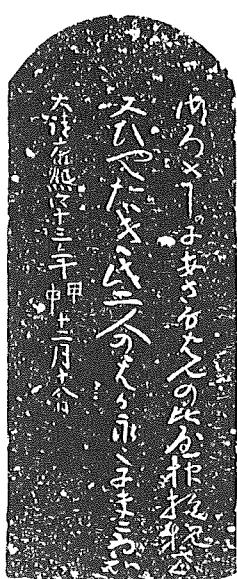
てくる比屋根撻親雲上は薰氏（元祖は伊波子仲賢という）の出身で、池原門中（元は大城であつたという）中興の祖と目される。薰氏の家譜が

現存せず不明瞭な点が多いが、同門中の銘苅光良氏によれば、約二〇年前に墓を開いて調査した際、多くの厨子甕が確認されたという。その厨

子甕中もつとも古い銘のあるものが八姓比屋根撻親雲上（一六四三—一七〇八）の厨子甕であつたという。碑は保存状態が比較的良好、銘文も



（裏）



（表）



江洲按司墓碑（片面）

口上之覺

上覽相讀也
支月三日伊豆味親雲上御取次傳

所在地 呉志川市字江洲 江洲城跡内
建立年 不明
法量 縱二一・六cm 橫一三・〇cm
(銘文刻字枠内の寸法)

碑身全長・縦一〇九・三cm
石質 微粒砂岩 (ニービヌフニ)

【銘文】

兄
えすあんしはか左

妹
つきおやのろはか右

亥
正月廿八日

嘉陽筑登之

嘉陽筑親雲上

真境名筑親雲上

長浜親雲上

與原親雲上

真境名親雲上

【解説】江洲按司とその妹つきおやのろの墓碑であるが、建立年および撰(書)者ともに不明である。同碑は江洲城跡の南側崖下に造られた墓庭中央部に、指状自然石のほぼ真中を削って刻銘し、台座をつけずに造立してある。碑は比較的体存状態が良く、鮮明な拓本が採れる。

『武姓家譜 正統』(嘉陽家)によれば、江洲按司(?) - 一四七二)は、唐名を武源明、名乗りを宗祖と称し、尚泰久七男の尚武であるといふ。同家譜には、江洲按司を元祖となすことを奏請し、許可されたいきさつを示す口上覚が収録されている(一世宗祖 康熙五十八年条)。参考のためにそれを次に示しておく(『那霸市史』家譜資料三 首里系)。

この口上覚は一月二十八日に奏請され、次書された上で三月十日には上覽に供され、許可がおりてている。

唐人墓碑文（片面）



【銘文】

福建省泉州府同安縣難民□□水櫃飄來
(坐落?)

呂仁

呂春

清考呂孝等墓

洪貴

胡明

道光四年十二月初六日立

【解説】一八二四年、思納間切仲泊村に漂着した唐人五人を葬つたときの墓碑である。『中山世譜』尚灝王の道光五年（一八二五）条に、「（道光）五年乙酉、遣大通事紅泰熙。官舎武弘毅等。坐駕海船一隻。護送福建泉州府。同安縣難人。呂正一名。及廣東省潮州府。澄海縣難人。船戶蔡高泰等。二十二名。入閩。其呂正。原共三十二名。坐賀商船一隻。該縣出口。洋中陟遇颶風。船隻沉覆。淹斃舵梢二十六名。呂正等六名。坐落水櫃。客歲飄來恩納郡。中泊村洋面。內五名已死。就地殮埋標記。呂正一名。榜腹待斂。即刻援扶上岸。以粥調養。方得復蘇。隋由陸路護

所在地 恩納村字仲泊

建立年 道光四年（一八二四）

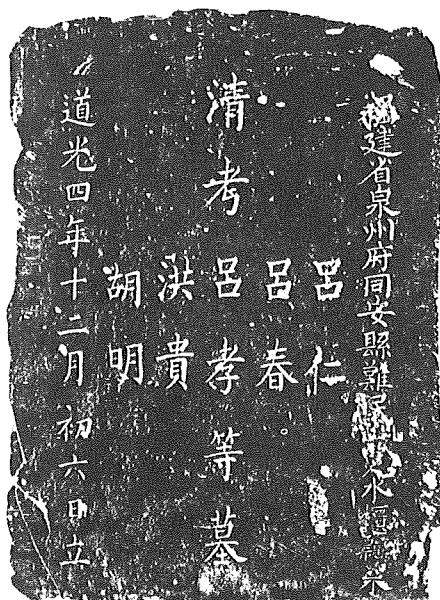
法量 縦六九・五cm 橫五一・〇cm

石質 微粒砂岩（ニーピヌフニ）

送。来到泊村。照例養贍。」と当時の状況が記してある。この『中山世譜』の記事は唐人墓碑銘と一致（『中山世譜』は道光五年条につくるが、「客歲」すなわち去年とある）する。乗組員三十二名のうち、六人が水櫃の中に入つて漂流したが、呂正だけが助かり、五人は漂着したときはすでに死亡していた模様である。この時唐人の治療にあたつたのは、真栄城親雲上秀久（唐名・介維新）という下庫理御番医者であつたらしく、『新参介家譜』（真栄城家）道光六年条に褒賞記事が見えている。

この墓碑で『中山世譜』で判明しなかつた五人の名前がわかり、また、『中山世譜』によつて当時の模様を知ることができる。救助された呂正是陸路で泊村に護送されて養生したのち、翌道光五年に中国へ送り届けられている。この唐人墓碑は、仲泊遺跡の北方約二〇〇メートルの場所に位置するが、もともとこの場所にあつたわけではなく、唐人を埋葬した墓地近くに建立されたものが、何らかの理由で現在の場所に移建されたものであろう。碑は旧五八号線近くの土手に建ててあつたが、道路側溝近くに移した上で、台座がわりにセメントで固めてある。

現在、同碑が建立されている場所は風が強くあたるところであり、二人以上で採拓するか、風を防ぐ工夫が必要となる。また、碑をセメントで固めた際に銘文近くまで迫つてるので、台座近くの水貼りは水量を少なめにし、その部分の上墨はやや乾燥したころを見計らつて、小形タングボを使用して採拓することが鮮明な拓影を得るコツである。



沖縄県立博物館

沖縄県立博物館紀要

第 11 号

1985年3月20日 印刷

1985年3月30日 発行

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903 那覇市首里大中町1の1

TEL (0988) 84-2243

86-4353

印刷 丸 正 印 刷

〒902 那覇市国場349-4

TEL (0988) 54-8494 (代)